

山村の生活と共有林

——奈良県吉野郡上北山村西原・天ヶ瀬——

小川 直之

- | | |
|------------|---------------|
| 一、はじめに | (五) 年中行事 |
| 二、生産活動の諸相 | (六) なりわいと儀礼 |
| (一) 農耕と養蚕 | 三、共有林と祭り |
| (二) 採取と狩猟 | (一) 西原の集落と共有林 |
| (三) 椎茸と炭焼き | (二) 天ヶ瀬の祭りと講 |
| (四) 林業 | 四、結びにかえて |

一、はじめに

本稿は上北山村西原・天ヶ瀬における人々の生活の一端を通し、山村を民俗学的に捉えていく際の、指標の析出を試みることに目的である。

日本各地の山村のあり方には、さまざまな形態があることが指摘

されている。たとえば千葉徳爾氏は山村の主要類型として、狩猟村落、林業・林産村落、焼畑村落の三類型をあげ、これらが順に東北日本、中部日本、西南日本にあることから、「この配列が、日本における山村生活発達の段階を、平面に表現したものでないか」⁽¹⁾という仮説を提示している。また、石川純一郎氏は後に紹介するように生業を目安に山村を五類型に分け、藤田佳久氏は地理学の立場から今までの研究を縦断して整理し、山村類型を静態的類型と動態的類型に分け、後者の類型による分析の必要性を述べるとともに、入会林野の有無による山村の類型化を検討している⁽²⁾。

こうした類型論は、その目的に明晰な課題が存在しない限り、混乱を招きかねないわけだが、右記の三氏が類型化の基準にとっている生業のあり方や入会林野・共有林野の有無というのは、一山村の民俗文化を捉えていく際にも有効な視点になり得るのでなからう

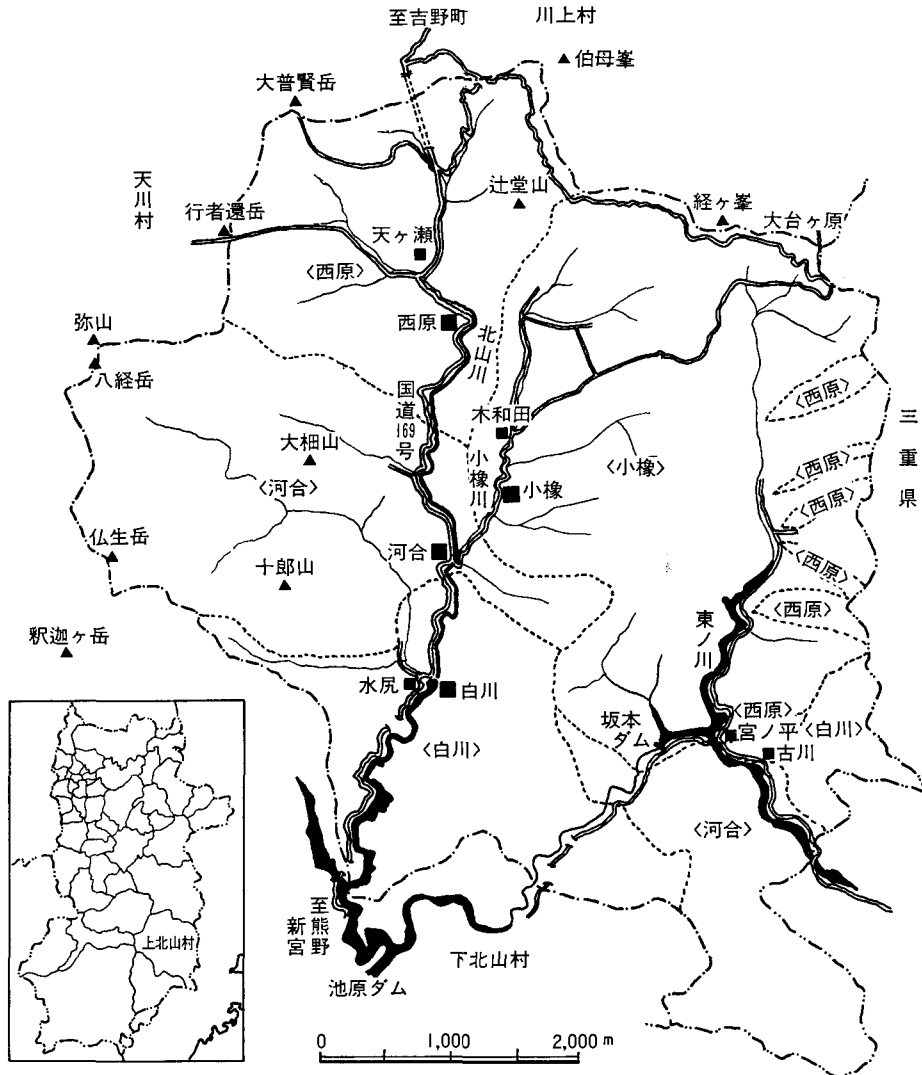


図1 上北山村の位置と大字 (『わたしたちの村』『上北山村の地理』より作成)

か。山村というのは、すでに千葉氏が指摘しているように、基本的には山地から得られる諸産物、諸資源を基盤として生活を営む山地立地村としてよいだろうし、また、このような生活基盤を持つところでは、利用し得る山野所有のあり方が、生活のさまざまな面に深くかわることが十二分に予測されるからである。この場合の入会林野・共有林野の存在の有無は、勿論上記の生産基盤を前提としてのことである。本稿では以上のことを踏まえ、上北山村における生産活動、および共有林所有と所謂ムラの関連の二点に絞って、伝承実態を紹介、分析しながら目的に近づいてみたい。

なお、本稿にかかる現地調査は、昭和五十六年十一月、同五十七年八月、同五十八年十一月、同六十年九月に約二〇日間行い、この間に得られた資料

に基づいて執筆するものである。

二、生産活動の諸相

上北山村は、奈良盆地から吉野山地の一つの分水嶺である伯母峯を越したところにある。大普賢岳、行者還岳、弥山、八経岳、仏生岳など、修験者の奥駆け道で知られている大峰山系が村の西部にそびえ、さらに村の東北部には大台ヶ原があり、深い谷をもつ北山川流域の最上流部に立地している。集落は北山川の上流から天ヶ瀬、西原、河合、水尻、白川、そして、河合で北山川に合流する小椋川流域には木和田、小瀬、椋本、小原、また、下北山村の池原で北山

表1 職業別世帯数（昭和三十四年三月三十一日現在）（『上北山村の地理』一四〇頁による）

大字別	林業				公務及 自由業	農業	商業	建設業	運輸 通信業	サービ ス業	電気業	製造工 業	金融業	その他	計
	山経	山勞	木材	製炭											
西原	一	七九	五	二	七	一	五	八	九	一	一	二	〇	一四	一三五
河合	二	三八	六	三	四	二	一	一三	〇	〇	〇	四	二	三〇	一九三
小椋	六	四七	四	五	七	二	八	九	二	〇	〇	〇	二	一〇	一五八
白川	二	六五	一	六	一〇	二	二	七	一	〇	六	〇	〇	一六	一五五
東ノ川	一	七一	六	三	二	〇	八	六	四	三	〇	一	〇	一〇	一〇六
割合	一一・二	三〇・〇	四〇・六	一九・三	五〇・二	〇・五	三四・二	四三・六	五六・一	二二・三	一七・〇	七・一	二・〇	八・〇	一〇六・八
割合	一・八	四三・七	五・八	二・八	七・三	〇・七	四・九	六・三	八・一	三・二	二・五	一・〇	〇・三	一・六	一〇〇・〇

川に合流する東ノ川には宮ノ平、古川などがあり、村役場のある河合は、近鉄吉野線の上市駅からバスで二時間余の位置である。

上北山村の成立は明治二十二年の町村制の施行によるもので、集落は大字でいえば西原（天ヶ瀬を含む）、河合、白川（水尻を含む）、小椋（小椋川沿いの各集落を含む）の四つになるが、近世にあっては西野村（明治八年に西原と改称）、川合村、椋本村、小瀬村（明治八年に椋本、小瀬が合併して小椋村となる）、白川村の五ヶ村に分かれていた。しかし、現在の上北山村の各大字は、この時代も「北山郷上組」として一括して呼ばれることもあり、明治期の町村制による地域の決定は、こうした歴史的経緯に基づいているといえよう。「北山郷上組」などのいい方は、たとえば『北山郷由緒書上

表2 明治9年の税地 (『上北山村の歴史』による)

		田	畑	宅地	山林
西原村	本村	町畝歩 2.39.03	町畝歩 4.18.23	畝歩 81.00	町畝歩 2492.71.28
	飛地	38.28	50.03	10.25	962.80.00
小椽村	本村	2.84.11	4.85.01	94.19	3902.33.07
河合村	本村	1.97.25	5.66.06	1.10.08	1925.93.16
	飛地	10.21	67.29	12.06	628.48.20
白川村	本村	3.88.03	8.10.09	1.68.28	3109.68.00
	飛地	57.18	22.20	3.09	1635.61.18
		藪地	芝地	秣場	計
西原村	本村	畝歩 .27	畝歩	町畝歩	町畝歩 2950.11.21
	飛地	.27			963.80.23
小椽村	本村	16.09	1.18	5.87.11	3917.02.16
河合村	本村	29.05	2.13	4.47.10	1939.46.23
	飛地				629.39.16
白川村	本村	16.27	1.05		3123.53.12
	飛地				1636.45.05

(「飛地」は東ノ川のことと思われる)

組』(小椽奥村隆司氏所蔵)、『享保十二年十二月 吉野郡北山郷上組五ヶ村由緒書帳』(小椽奥村恵司氏所蔵)など、近世史料に多くみることができる。上組に対して下組は現在の下北山村で、両組の

関係は密接なものがあつたのである。上北山村の歴史的な経緯は、すでに『上北山村の歴史』⁽⁴⁾に詳しく述べられているので、ここではまず初めに西原、天ヶ瀬を中心にして生産活動の諸相をみていくことにする。

『北山郷由緒書上組』(小椽奥村隆司氏所蔵)によれば、北山郷について次のように記されている。

一、北山郷発端之儀者極深山険阻之惡所、年々十月上旬より翌春二月上旬迄雪降積、山稼等難出来都而作物実乘不宜土地柄、然ル処往古諸方より立越堀込柱之小家掛等ニ而住居致し、此深山谷間江銘々追々畑地切開耕作渡世を専ニ致し、御地頭之御政事も無之、食物者栃之実、榎之実、木之芽等之類多分取入貯置雑穀食用之足為致し、当日を相凌候極難渋之場所ニ罷在、諸色売冗之場所江者行程廿五里相隔、紀州浜筋江者難所二日路有之、都而不弁理之場所ニ而自然ニ田畑開発丹誠を尽し候得共當時之人家ニ割合候ハ、耕地格外之不足いたし、尤当所産物木材并茶類を専らとす

この書は慶応四年二月に北山郷の西野村、小瀬村、椽本村、川合村、上池原村、下池原村、池峯村、寺垣内村、浦向村、佐田村、上桑原村、下桑原村、大瀬村の各庄屋と上組総代(白川村庄屋)、下組総代(上池原)の連名で、「鷲尾殿御執事申様」に宛てられた文

書である。

現在の北上山村・下北山村の来歴が記されており、開扉の第一にある前掲の記事からは北山の土地柄をよくうかがうことができる。木材、茶類を産物とし、耕地が少ないのでトチやカシの実、木の芽などを雑穀の足し前として生活を送っているというのである。

耕地からの生産物では自給でまず、米は大半が上市などから買い求められたわけだが、ここではこうした暮しぶりを如何に理解していくか、西原、天ヶ瀬での具体的な生活の諸相をあげながら考えてみたい。

統計資料によって西原の家々の生業をみていくと、一九七〇年の世界農林業センサスによれば、総戸数一一七戸のうち農家は八戸（専業農家一戸、第二種兼業七戸）、林家三〇戸とあり、一九六〇年時点では総戸数一二〇戸、農家三六戸（専業二戸、第二種兼業三四戸）となっており、農家数は一〇年の間に激減している。一九七五年農業センサスでは農家は五戸（すべて第二種兼業）とさらに減じており、農家の比率は極めて低くなっている。昭和三十七年の調査によれば西原の職業構成は、山林経営三戸、山林労務六二戸、材木業一戸、大工五戸、建設業一戸、小売業五戸、旅館二戸、道路工手一戸、運転手二戸、運送業一戸、会社員・銀行員六戸、公務員一三戸、司法書士一戸、住職一戸、無職一七戸、合計一二二戸⁽⁵⁾とある。

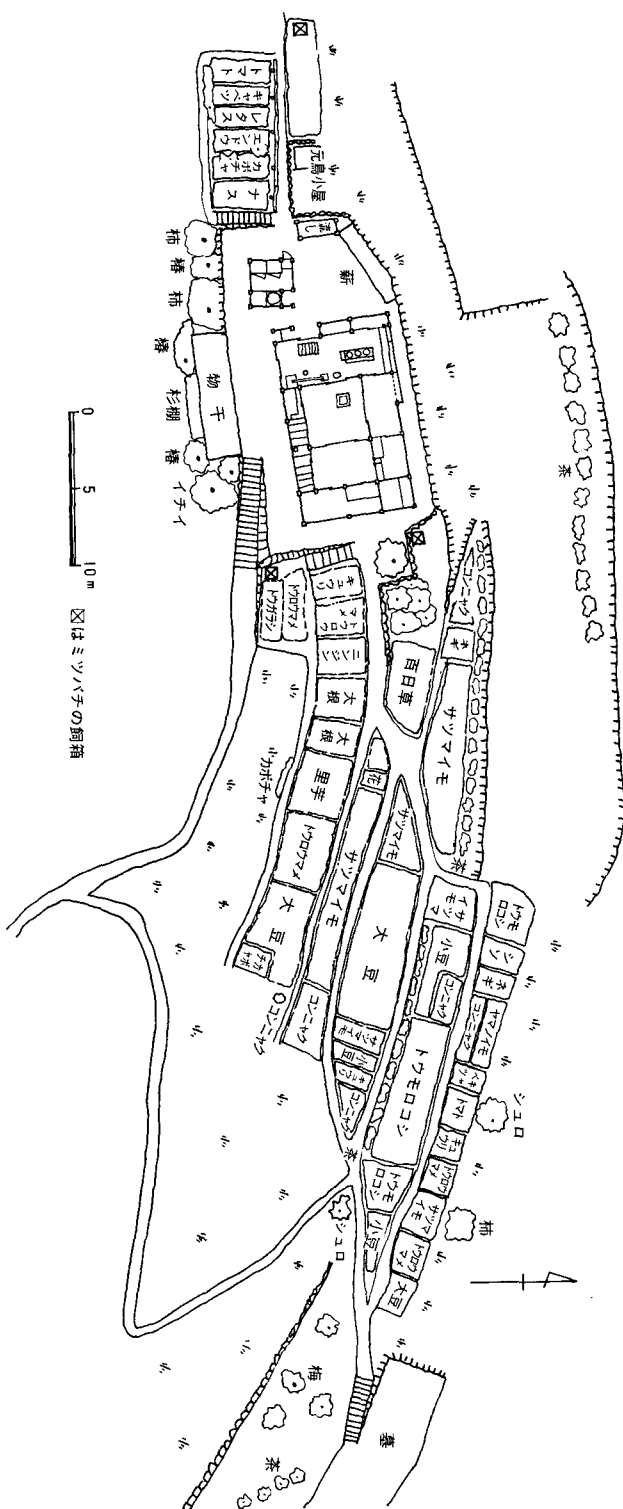
農業という分類はなく、山林労務に携わる家が半数を占めているのだが、多種多様な職業によって構成されているのがわかる。昭和三十七年といえは、所謂高度経済成長を迎える前であり、平地農村に比べて職業の多様化が早くから始まっているといえるのではなからうか。

（一）農耕と養蚕

右記のように昭和三十年代後半以降、農家数は激減している。西原の耕地面積をみて、一九六〇年には三・一haあった耕地が、一九七〇年には〇・七ha、一九七五年には〇・四haとなり（一九七五年農業センサス農業集落カードによる）、やはり激減して現在に至っているのである。近年の農業についての概略は以上の通りだが、初めに記した『北山郷由緒書上組』の一文からは、耕作地の多寡はともかく、大半の家が農耕に携わっていたことは推測できよう。後述するように、年中行事のなかには、直接農耕にかかわる儀礼がみられるのである。

水田稲作 現在、西原では水田稲作は行われていないが、昭和三十四年九月の伊勢湾台風の被害を受けるまでは水田があった。細原の現在の小学校の運動場、宝泉寺の東、小原のシモギリ、泉のオオダ、天ヶ瀬では高田和の谷などにあり、当時は牛を飼ってシロカキ

図2 天ヶ瀬岩本重雄氏旧宅屋敷図（昭和57年8月現在）（佐々木高明・岩井宏實・松崎憲三・小川直之作図）



をする家が七軒ほどあったとされている。面積は、天ヶ瀬の高田和には七、八反歩ほどがあり、反当二石そこそこの収量があったといわれている。明治初期には表2のように二町三反九畝三步の水田が西原にあったのである。

水田の開田はこれ以前に遡ることができ、東ノ川の出口に残され

た「御代官記」によれば、天保四年九月の代官所役人の検分で西野村に四反七畝一三歩の切添の水田があるのが判つたと記されている。⁽⁶⁾ 水田耕作は近世末には行われていたわけであり、現在も泉には、石垣を築いた小規模の棚田の遺構がみられる。灌漑は谷から樋で水を引いて行い、田植後には苗代を作った田に、田の神様に供え

とということ(7)で櫛とミョウガがあげられていた。また、苗取唄や田植唄の伝承もある。

ソノとハナシ 水田耕作をする家は僅かであり、大半は畑作によって日常の糧を得ていたのである。畑にはソノとかハタケといわれる家の回りの常畑と、家から離れたヤマバタがあり、ヤマバタにはハナシといわれる焼畑とオコシという開墾畑とがあった。

ソノでは、現在はナス、キュウリ、キャベツ、大根などの蔬菜類を中心に、大豆、小豆、トウモロコシ、里芋、サツマイモ、コンニャクなどが作られている。図2は昭和五十八年八月時での天ヶ瀬・岩本重雄氏宅のソノの利用状況である(岩本氏宅は、その後細原に転出)。屋敷回りの畑を小さく区切り、各種作物を栽培しているのがわかる。すでにアワやシコクビエ、キビなどの穀類は作られていないが、自給用作物によって、まさに七色畑の様相を呈しているのである。畑を小区画にして利用し、連作を防いでいるわけで、自給用としては豊富な作付となっている。

ソノでの栽培作物は、かつては穀類が多く、アワ、ヒエ、シコクビエ、キビ、トウキビ、ソバ、大麦、小麦などが作られていた。冬作には大麦や小麦を作り、夏作に各種穀類を作ったのである。冬作は大麦を多く作ったが、決して十分ではなく不足分は購入され、小麦は自家用の味噌・醤油に使われていた。味噌を家で作ったのは昭

和初期までだったようである。アワ、トウキビは現在も僅かに作る家があるが、大方は戦後までであった。アワはカラウスで搗いて皮をとり、竹箕であおり、水に漬けて米と一緒に蒸してアワ餅にして食べた。トウキビは石臼で粉にし、やはり餅にして食べた。トウキビ餅といい、トウキビをカラウスで搗いて皮をむき、竹箕であおってから水に一日間漬け、赤味をとってアクを抜き、水切りをしてからカラウスではたいて粉にする。トウキビ餅はこれを熱湯で練ってから握り固め、糯米を下にして蒸し、臼で搗いたものである。一臼は二升で、このなかには糯米が五合くらい混ぜられたが、この餅は少し匂いがあり、砂糖や醤油をまぶしてオカキなどにされた。トウキビの茎は箒に作られたりもした。なお、アワなどの種子は四尺くらの櫃に入れて家のナカウチ(納戸)にしまっておいたといわれている。

シコクビエも戦後までで、畑で苗を作り、これを本畑に植えていき、食べる時には臼で搗いて皮をむき、ヒキウスで碾いて粉にし、団子や餅にされた。ヒエは昭和十年ころまで作ったといわれているが、ヤマバタでは収穫後、大きな炭竈の上に円錐形に木を立てて小屋のようにし、なかに木を渡して棚を作り、ここに簀子をのせて薄い藁を敷き、この上に穂を入れて乾燥させたという。炭焼きの熱気によって乾燥させるわけで、白山麓のアマボシ(8)のような専用の

用具があるわけではないが、同じような乾燥法が行われていたのである。

ソバは、戦中・戦後には木を伐って禿山になっているところの雪が消えると、山を焼いて種子を蒔いた。役場が信州からソバの種子を買って配給することもあったといわれているが、古くからの作物で、ハナシでも作られていた。収穫したソバは、長さ一間、幅四尺、高さ五尺という大きな木の箱に保存され、食するときにはヒキウスで粗く碾き、フルイで振るってから再び碾いて粉にした。ソバ粉に塩を入れ、熱湯をかけて練って食べるのが一般的で、場合によっては黒砂糖を混ぜたり、あるいは粉を練って団子にし、オカイサシに入れたり、ご飯に混ぜることもあった。

里芋は現在も作られ、これにはマイモ、エグイモ、ハジカミ、赤茎の芋などがある。マイモ（カブイモ）が一般的で、茎の付いたまま畑で土をかぶせて保存すると腐ることがないとされている。赤茎の芋はズイキを漬物にしたり、干して巻寿司の芯などに使われている。サツマイモも作られ、イモは台所の地下に作ってあるイモグラに入れて保存したり、干しイモといい、一度蒸してから切り、藁縄に通して軒に吊して干して保存した。

コンニャクは日常的に食べるものでなく、むしろご馳走の部類であった。これは畑の隅や周囲で作るもので、正月の前に桶に一杯の

コンニャクを作っておき、正月から春の食べ物となっていた。コンニャクは人によって逃げていくとか、つくといわれている。逃げていくというのは、いくら作ってもできないことで、つくというのは少しでも種が残っているとどこにでも芽を出すことである。また、コンニャクに花が咲いたら不幸が起ることも伝えられている。

ソノの主な作物は以上の通りだが、この他、小椽などでは一部に麻を作る人もあった。麻縄を作るためのもので、かつては、紀州の帆前船の帆柱用に長い檜を筏で新宮に出したが、これに麻縄を使っていたといわれている。

ヤマバタは文字通り山の畑で、集落から離れた畑のことである。奥山などといわれるかなり離れた山に作られることもあり、断片的だが出作小屋を作ったの耕作をうかがわせる言伝えもある。前述のようにヤマバタにはオコシとハナシがあり、オコシは開墾して作った畑で、アワなどが作られた。ハナシは焼畑のことで、ハナシヅクリとか単にハタともいい、一部には戦後まで行われた。しかし、本格的なハナシは明治末、大正初期までだったようで、現在伝承されているハナシは、その終末期の姿といえる。

ハナシを行う山は、比較的平坦なところが選ばれた。西原ではフナ（舟）の平、オオタワラ、アリノキ、泉谷のサカ、泉谷のダン、河合峠付近などで行われ、新山といって雑木の山をこなげて（伐っ

て) ハナシを作る場合と杉などの木を材木師に売り、伐採した跡で作る場合とがあった。ハナシをよく行ったのは、家内(家族)が多く、あまり耕地をもたない家で、山は山持ちから借りるのが一般的だった。お礼は決まったものはないが、たいてい小豆をもっていったといわれている。山を借りるには、個人で借りてハナシを作るだけでなく、数人で借りて共同して焼き、その後各戸に区分して作ることもあった。たとえば、天ヶ瀬組のある人は、明治の初め頃に杉山の伐り跡を五年ほど八〇一〇人で借りてハナシヅクリをし、一人に「一斗五升蒔」の広さで区分し、ハナシの後は植林をしたという。

ハナシヅクリの方法は、雑木は春早くに伐っておき、梅雨前に焼いて畑にしていた。鋸、ヨキ、ナタ、草刈鎌を使って下刈りをし、木を伐り、トウグワで地ごしらえをしてから火を付けて焼いていく。伐り払った木や草は一面に広げておき、四周に延焼を防ぐための火道(ヒミチ)を作る。火道は六尺ほどの幅で、斜面の上下の火道は両横より広くした。焼くまでの地ごしらえは、一人で五日から七日かかり、杉山でも新山でも一人ではできず、七、八人で行った。木を伐った後の切株はそのままにしておき、火は初めに斜面の上端の火道に入れる。檜で松明を作り、三尺から一間くらいの間隔で火を付けて燃し下げていく。火入れは朝から始め、たいてい夕方

までかかり、焼き終ると翌日、セギをつけていく。セギというのは、山の斜面に横に作る土止めのこと、傾斜がきついところはセギが多くなる。セギの間隔は山によって異なるが、一間から一丈程度だった。新山の場合、太い雑木があるとセギ用に伐って残しておくのである。数人でハナシヅクリをした場合は、セギをつけるときに地割りをした。地割りは各区画が同じ面積になるようにし、各自の場所にくじ引きで決めていった。木の切株は、とくに起こすことはせず、セギをつけるとトンガで地をならし、灰が風で飛ばされたり、雨で流されたりしないようにしていった。

ハナシで作る作物は、初年目が小豆、大豆、大根、二年目がアワ、ヒエ、三年目はナンバ(トウモロコシ)やマイモで、土の良いところでは小豆、四年目はマイモ、または雑作りといってさまざまなものを作った。作物の順序は人によって異同があり、初めに小豆を作ると次はキビ、アワ、エグイモなど、初めに大豆を作ると次は小豆、最後にソバ、あるいは初めにアワか大豆を作り、二年目にヒエ、最後にジャガイモなどともいわれている。ハナシでは小豆や大豆といった豆類のできがよかったが、猪の害を受けやすく、ナンバなどはよく食われたという。また、細原の大正三年生まれの人によれば、自分の祖母はハナシに半年くらい山に入るのに、米を五升もつていったが、三升は残してきたといい、山に小屋を作って農作業

をしたのが窺えるのである。

奈良県吉野郡の焼畑については、宮本常一氏の『吉野西奥民俗採訪録』⁽⁹⁾によれば、宗檜村ではキリハタといい、冬伐り、春焼きで、ヒエ・アワを中心に作った。天川村ではキリハタとかハタといい、四月焼きと八月焼きがあり、春焼きはヒエ・アワ・タダイモの順、夏焼きはソバ・アワ・タダイモの順で、出作小屋を作ったハタをすることは少なかった。大塔村ではキリハタ、ハタで、出作小屋を作った行われた。三〇年ほどの山を秋に伐って春焼きし、ヒエ・アワ・小豆・アワ・小豆の順に作る。十津川村ではキリハタといい、出作小屋も作られ、アワ・ヒエ・ソバ・タダイモの順に作ったとある。つまり、大峰山系の西部では焼畑をキリハタとかハタといい、ヒエ・アワを中心として出作小屋を作った耕作するのが特色といえよう。ハナシという呼称は、川上村伯母谷では焼畑をハナシ・ハナシヅクリ⁽¹⁰⁾といい、伯母峯周辺に集中したい方⁽¹⁰⁾のようだが、西原での焼畑伝承からは、この地域もアワ・ヒエを基本作物とし、出作小屋も作られたようで、大峰山系西部と同様な型の焼畑が行われているといえよう。

ハナシは四、五年、または五、六年作ると植林するのが普通だったが、ハナシの後の植林は初めの二、三年は木の成長が早い。ところが三〇年くらいたつと、ハナシの跡は他に比べて五年くらい成

長が遅れているといわれている⁽¹¹⁾。

養蚕 養蚕は昭和十二、三年ころまで行われていた。食糧増産で次第に止められたのである。当時、西原では七、八軒が行っていたが、盛時は乾繭所もあり、繭を乾燥させて出荷していたという。養蚕農家の戸数は多くはないが、現金収入の一つで、春蚕と秋蚕の二回が行われていた。春蚕は五月初めに部屋を暖めて掃き立て、六月に上簇して収繭し、秋蚕は八月のお盆前に掃き立て、お盆に二齢となり、九月下旬に繭を出した。春蚕の方を大きく行い、種紙で二枚ほど飼ったという。養蚕組合も組織されており、一時は名古屋から一括して種を購入したこともあった。

(二) 採取と狩猟

前述のように統計や各種資料にあらわれている耕地面積は決して多くない。明治九年の資料では、西原は表2のように田畑合わせて六町五反七畝二六歩(東ノ川の西原分を含めると七町四反六畝二一歩になる)で、同年の戸数は五三戸(他に神社二、寺一)、人口は男一四七人、女一四〇人で計二八七人⁽¹²⁾とある。ここにある耕地面積は税地の面積で、おそらく焼畑は含まれていないと思われるが、これだけでは自給していくことは困難だったのでなかろうか。食糧事情

を数値として示し得る資料はないが、トチやカシの実の食法は現在も詳細に伝承されており、焼畑の雑穀類や自然採取による木の実などは日常生活の上で重要な位置を占めていたと考えられよう。⁽¹³⁾

食生活については、シロメシ（米のみの飯）は正月三が日だけで、他はアワやヒエなどを食べ、米二斗五合とカシの実があれば、五、六人家族で何とか八カ月くらいは食べられた。ヒズイ（夕飯）はオカイサンで、米一合にマイモなどを混ぜ、一〇人くらいで食べるが、オカイのマイモは子芋を半分に切るとぬるぬるして口ざわりがよく、切って一緒に煮たものなどといわれている。

木の実際の採取と利用 木の実ではトチとカシ類、およびクリが採取され、食糧として利用されてきた。餅に搗いたり、飯に炊いたりされた。クリは西原ではエダン平（枝の平）というところにたくさんあり、小粒のいいクリができ、西原中の人々が採りにいったといわれている。

さて、トチとカシ類の実に関しては、河合に元禄九年（一六九六）の次のような史料が残されている。⁽¹⁴⁾

仕渡し申一札之事

一、各々村中持分東ノ川すち之山、我々さいしよへかつてニ御座候故、村之衆へ様子申候而も又ハ不申候而も、村中山ニ而たきき其外とちか志之みまでひらい参候へ共御ゆるし被下忝存候所ニ、

此度より右之山ニ而たきき一切とちか志までひらい申間敷旨、かたく御申付被成候付、山川共各々村中へじこんいごさいめこし仕間敷候、為後日一札仍如件以上

丙午元禄九年

正月廿七日

大塚 伊右衛門 印

伝 蔵 印

吉右衛門 印

三 助 印

重 太 〇

与左衛門 〇

□兵衛 印

川合

利左衛門殿

茂右衛門殿

この史料は、大塚（白川）では東ノ川の各村の山で自由に薪やトチの実、カシの実を拾うことが許されていたが、以後は一切拾わないというのである。なぜトチやカシの実を拾ってはならぬとされたのか、この史料ではわからないが、こうした証文が作成されたことから、トチやカシの実の重要性が窺えよう。時代は下って、延享三年（一七四六）の小瀬村の村明細帳には、「一、作間ニ者男ハ御材木仕廻候以後ハ末木、雑木、伊丹桶樽等仕候、女ハ香皮をそぎ、或は栃櫟之実をひらい渡世送り申候」とあり、天保二年（一八三一）の栃本村の村明細帳には「女ハ草刈秋ハ栃櫟之実ヲ拾ひ粮ニ仕

候」⁽¹⁶⁾とも記されているのであり、近世期を通じて木の実が食糧の一部になっていたのが知れよう。

△トチの実▽ 木の実の採取と利用を具体的にみていくと、トチの実は九月のお彼岸ころから拾い始められ、正月用などの栃餅に搗かれた。トチノキはどこにでもあるというものでなく、昔から大事にされ、「トチノキだけは非常の時のために残しておけ」などといわれ、トチノキが数本まとまっていると、この場所を栃山と呼んだりもしているのである。たとえば天ヶ瀬では、高田和の奥の矢毛尾谷にトチノキが九本ほどあり、ここが栃山といわれている。

トチの実の採取は、河合では共有山にトチノキが残っており、それぞれ所有者が決まっています、ここで拾われたのに対し、西原や天ヶ瀬では共有山のトチの実はこのを拾ってもよいとか、どここの山でも拾うのは構わないといわれており、自由採取のようである。トチの実の木によつては一石も拾える木があり、実は乾燥さえさせておけば保存がきくので、食べる場合は常に五、六年前のものが使われている。トチの実を拾うと、水に一週間くらい漬けて虫殺しをし、天日でよく乾燥してカマスや袋に入れ、天井にのせたり吊したりしておくのである。

栃餅の作り方は、まず保存してあるトチの実を水に漬けて四、五日間おき、熱い湯に漬ける。湯加減が難しく、熱すぎてもだめだ

し、長く漬けすぎてもよくない。気持ちとしては湯をかけるという感じでいい、この後トチの実の皮をむく。殻を専用の道具(木製)で割って実を出し、アクミズ(灰水)に漬ける。灰水はクドの灰をためておいて、トチのアクとし、これで作る。トチのアクは木の灰を使うが、ニガキといってエンジュに似た木は使えない。灰水はトチのアクをクドで一度暖め、これを木綿の布にとり、上から熱湯をかけてとったものである。空かんなどを容器とし、底に五つくらい穴をあけてなかに杉の小枝を入れ、この上に木綿布に入れた灰をのせて熱湯をかける。灰水が容器からポタポタと落ちるくらいがいい。こうして採った灰水は、アワセアクといい、なめてみて舌にピリッとくる濃さになる。

トチの実のアワセアクに一、二晩漬けておき、この後袋やメカゴにとつて一週間くらい流れ水に晒しておく。流水も加減が難しく、きつい流れではだめで、いくらか淀みがあった方がよいとされている。流水でない場合は桶などに入れ、たびたび水を交換して一〇日間くらいおく。水晒しは、実を割って苦みがなくなったら揚げてよい。この後はクイアクといい、アワセアクより薄い灰水に実を一晩漬けておき、これを洗って糯米と一緒に蒸して餅に搗くのである。栃餅はクイアクが濃いと灰辛くなり、逆に淡すぎるとトチが蒸らさんといわれている。

湯かけ、アワセアク、水晒し、クイアクと微妙な調整が必要なか
けである。糯米と一緒に蒸す場合はトチの実を下に入れ、上に米を
のせて行う。糯米とトチの実の量は、米が五合にトチの実が一升五
合にし（割合は適宜である）、二升の臼で搗く。

このように作られた栃餅は丸餅にするか、ネコといって蒲鉾状に
まるめ、切って食べる。ネコはモロブタに入れて風に当てなければ
ば、四、五日は軟らかい。栃餅の味については、搗きたてで暖かい
うちは粘りがあってうまいが、さめるとさくうなり（粘りがなくな
ること）、ボロボロになるといわれている。

△カシの実▽ カシ類の実は榎飯や榎餅にして食べられた。榎飯は
稗飯よりうまく、食べることも多かったとのことである。カシ類は
「上北山村所産樹木目録」⁽¹⁷⁾によれば、アカガシ（北山名・アカガ
シ、オオガシ）、イチイガシ、アラカシ、シラカシ（北山名・シラ
カシ）、ツクバネガシ、ウラジロガシ、ウバメガシ（北山名・バベ
ガシ）が確認されている。これらの実はいずれも食用になったが、
アカガシがもっとも好まれたようである。伝承ではカシにはオオガ
シ（アカガシ）、イチビガシ（イチイガシ）、シラカシ、バベなどが
あり、何の実でもよかったが、オオガシの実をめぐって拾い、ま
た、バベの実は少なかったといわれている。

カシの実が落ち始めるのは、トチの実の少し後で、十一月頃にカ

シノミヒライ（カシの実拾い）に行った。男荷でイッカ（一荷）ず
つ背負ってきて、毎晩夜なべに一斗ずつ叩きつぶすのが仕事で、
これだけ叩かないと寝かしてもらえなかったなどという。一シーズ
ンに三石ほど拾ったという人もあり、拾った実はカシタキツチと
いう槌で叩いてつぶし、竹箕であおって殻をとり、冬仕事に石臼で
粉に碾いて保存した。カシタキツチはカシの木（アカガシ、シラ
カシのどちらでも可）かケヤキで作り、ケヤキの台の上で実を叩
く。

カシの実の粉は保存がきき、ケヤキの皮で作った櫃やブリキ缶に
入れておく。榎餅・榎飯はこの粉をシブ抜きして使うのである。シ
ブ抜きの方法はカシの粉を木綿袋に詰め、水に晒す。種などで水を
引き、水が流れ落ちるところに粉を入れた袋を置いて晒していく。
三日間くらい水をかけ続けるが、水をきつうかけたらシブが抜けな
いという。カシの実のシブ抜きは水晒しだけで、トチの実に比べれ
ば簡単だが、微妙な水量の調節が必要なのである。榎餅は、この
ようにしてシブを抜いた粉を糯米と混ぜてふかし、臼で搗いて作
る。榎飯は、晒した粉を手で握って水分をとり、しばらく干してか
ら米などに混ぜて炊く。

狩 猟 以上のようにトチやカシの実などは、食用にするとき
の技術伝承が確立されており、諸記録からも一つの食糧として重要

であったことが窺える。このような植物食に対し、他方では動物食も忘れることができないであろう。山野に徘徊する動物や川の魚は、同様に重要な食料だったのであるまいか。

狩猟は生業としてではなく、趣味としてとか名人芸として語られているが、昭和三十七年の調査ではこの前年にシシ(猪)二頭に鹿三〇頭をとった人もある⁽¹⁸⁾とか、かつては鉄砲をもっていない家はなく、鉄砲をもって植林に行き、また、家の近くに來た猪や鹿はみな撃ちとったといわれている。川の魚ではアユ、ウグイ、ウナギ、アメノウオなどが捕られ、漁業組合も設立されている。昭和三十六年の村役場資料による魚種別漁獲高は、西原の組合員だけでもアユ、アメノウオ、ウナギなどが三四六七⁽¹⁹⁾kgもある。この地方では正月や婚礼などの食物として魚の姿鮮が作られている。姿鮮は尾鷲などから入ってくるサイレ(サンマ)やサバばかりではなく、北山川で捕れるアユやアメノウオも使われている。姿鮮は魚の腹をさいてなかに飯を入れて作るもので、いわゆる馴鮮の姿をとどめている。姿鮮は儀礼食として伝承されているのだが、これは一方では、こうした食べ方の普遍性を示しているわけであり、アユやアメノウオは、海魚の代用だとはいえないであろう。

上北山の山にはシシ、鹿、熊、野兎、テン、ヤマドリなどがないて、これらを撃ったり罾を仕掛けてとった。シシは犬で追い、鉄砲

で撃つだけでなく、シシ道(ノータともいい、尾根道が主で、一mくらいの幅にできており、両側の笹や木が擦れている。)といって通る道が決まっているので、ここにシシ穴を掘ってとることも行われた。シシ穴は深い穴で、中にマンガリといって焼いて種油を塗った竹槍を三本くらい立て、穴の上に柴をかけておく。シシは柴に人間の臭いがあるうちは近付かないが、一年くらい経つと人間の臭いが消えてシシが穴にはまった。シシはマンガリに刺さって死ぬわけである。現在では行われていないが、西原や天ヶ瀬にはいくつもシシ穴があり、鹿も落ちてとれることがあったという。

熊は月の輪熊がおり、熊撃ちには数人で行く場合と一人で行く場合とがあった。冬場の熊撃ちは犬も連れずに一人で行った。熊は一月になるとウト(穴)に入るので、夏の間に入りそうなウトを捜しておき、寒の土用の頃に寝ているのを撃ちに行く。方法は、まず熊のいるウトの口に一寸ほどのカシの棒を立ててふさぎ、鉄砲で脅して熊を起こす。熊はウトから出ようとカシの棒をとろうとするので、ここを月の輪をねらって撃つのである。撃ちとった熊は皮を剥ぎ、油と熊の胆をとる。油はゆるい火で煮て保存し、皮膚病などの薬とし、熊の胆も薬とした。

鹿は植林した杉などの苗木を食ったりするので、駆除の対象にもなっている。鹿も鹿道が決まっている。尾根とサコにできている

が、サコの方が多く、青草が多いところに道がある。鹿道は下は一mくらいの幅で、上の方の木に傷ができてるのが特色である。鹿撃ちは犬を連れて一人で行く。

猟をする人と小動物のかかりについては、十分確認していないが、オオカミに対しては特別な感覚をもっていたようである。オオカミは賢いもんだといわれ、明治三十年生まれの人の父親が明治の末頃に小処温泉の奥に猟に行ったとき、オオカミが犬ににらまれていたのを助けたことがあった。このときには、オオカミに「山の番をせい」といったら、その後は熊などに植林した木を傷められなくなったという。また、山へ行くと「オオカミの千匹連れ」といい、オオカミが三上山から鳴き出してオクガケ道を通ることがあった。この鳴き声が聞こえると、天ヶ瀬の日浦の人たちはマエビキを金槌で叩いた。こうすると不思議とオオカミが鳴きやんだとのことである。

(三) 椎茸と炭焼き

椎茸栽培 椎茸の栽培は、すでに近世末には行われていた。天保十五年（一八四四）七月の東ノ川（小瀬村小前、栃本村小前）と本村の小瀬村・栃本村との出入文書の中に「本郷持分之内ニ而椎茸木其外諸木少々伐荒し有之候ニ付」云々とある。⁽²⁰⁾また、安政四年（一

表3 安政4年の各村林産物（『上北山村の歴史』より作成）

	西 野	小 瀬	栃 本	川 合	白 川
諸木材木	500本	1,000本	1,300本	1,500本	2,000本
椎 茸	5 荷	5 荷	3 荷	8 荷	—
舟 板	—	40枚	40枚	80枚	160枚

（ただし椎茸は10貫目が1荷）

八五七）の産物書上帳からは、表3のように西野村、小瀬村、栃本村、川合村で椎茸が産出されているのがわかる。さらに栃本村と白川村の明治六、七年の産物表にも椎茸がみえ、出荷されたことが記されている（表4）。安政四年の椎茸の記載も、「十貫目一荷也」とあり、各村何荷とみえているので、これが自給用のものでなく、

明治初期のように販売用であったことは想像に難くないであろう。このように椎茸栽培は、近世末には記録にあらわれ、しかも移出されたと考えられるのであり、予想外に早くから行われていた可能性がある。

西原では昭和十二、三年頃まで三、四軒の家が椎茸栽培を続け、かなり高額の現金収入になったようである。栽培量にもよるが、山から伐採された木を川まで運び出すダシの日当が五〇銭から一円、サキヤマが一円程度だった昭和初期に、椎茸で一

表4 明治初期の産物(『上北山村の歴史』168頁による)

	栃 本 村				白 川 村			
	明治6年		明治7年		明治6年		明治7年	
米	8,050石		8,050石		25,300石		29,630石	
麦	17,240〃		16,100〃		45,800〃		65,500〃	
大豆	3,000〃		2,850〃		7,300〃		8,960〃	
大栗	1,620〃		1,730〃		2,500〃		3,890〃	
小豆	0,380〃		0,370〃		1,500〃		2,260〃	
稗	1,850〃		1,520〃		7,500〃		5,220〃	
黍蜀黍					3,300〃		1,820〃	
それら			0,200〃		3,200〃		4,735〃	
豆根							0,150〃	
豌豆							3,770〃	
豌豆							0,300〃	
豌豆							0,010〃	
豌豆							0,080〃	
豌豆	1,920〃						4,800〃	
豌豆	240.0貫						1600.0貫	
大羅	240.0〃		200.0貫		780.0貫		1500.0貫	
胡椒							1.0〃	
真芋	70.0〃		70.0〃		500.0〃		2762.0〃	
薩摩	800.0〃		800.0〃		1500.0〃			
摩菜	140.0〃		150.0〃		13.0〃		245.5〃	
子							8.0〃	
葱							78.0〃	
葱							24.0〃	
萱紫							3.0〃	
蘇							10.0〃	
蔞							4.0〃	
蔞							10.0〃	
蔞							133.2〃	売
蔞	14.4〃		12.0〃		150.0〃	売		
蔞			8.0〃		500.0〃		126.2〃	
蔞			15.0〃		{ 30.0〃	売	{ 33.9〃	売
蔞	10.0〃	売			{ 7.0〃		{ 7.0〃	
蔞					{ 4.0〃	売	{ 20.1〃	売
蔞					{ 1.0〃		{ 5.0〃	
蔞	50.0〃	売	10.0〃				10.0〃	
蔞	140斤		130斤		900斤		24.2〃	
蔞							40.0〃	
蔞							2.4石	
蔞							0.250〃	
蔞	1000枚		1000枚		1050枚		2417枚	
蔞							96抱	
蔞							15000本	
蔞							160〃	
蔞							96000貫	
蔞							5〃	
蔞							6〃	
蔞							2〃	
蔞	950本	売	1500本	売			{ 杉3390本	売
蔞							{ 檜1122〃	〃
蔞							1疋	〃
蔞							5〃	〃
蔞	2疋		2疋		8疋			
蔞	2〃		3〃		6〃			
蔞	4羽		4羽		12羽			

シーズン一〇〇円にもなったといわれている。

現在の椎茸栽培の方法は、楳木に菌糸を移植して行うのが一般的だが、西原などで行われたのは菌糸移植をせず、自然栽培の方法である。カシ、シデ、ナラ、ホウソ（コナラのこと）などの木のある山を選び、これらの木を伐って山に放置し、菌糸が自然に付くのを待ったのである。楳木のある山を椎茸山といい、椎茸木（楳木のこ）を十一月下旬に伐り倒し、そのままの長さで置き、翌春三月になってからキザミといって斧で木に傷をつけていく。このときには枝を払ってしまい、後は放置し、木がある程度腐ってくる三年目くらいになると椎茸が生えてくるという。椎茸木の寿命は、シデは七、八年ほどだが、カシ・ナラ・ホウソは一〇年くらいは使え、この間、同所を椎茸山として使うのである。

椎茸は年二回、春五、六月と秋十一月に生える。シケ年でないとき椎茸は生えないといわれ、年によって出来、不出来があった。雨が多い年の方ができがよいわけで、「秋の彼岸の中日に雨が三粒でも降ると椎茸がよくできる」とされている。自然栽培といっても何もしないわけではなく、木の状態を見回り、秋に大雨が降ると、雨のなかを養を着て椎茸山に行き、木槌で椎茸木を叩いて回った。これを行うと菌糸に刺激が与えられ、椎茸のできがよくなるので、後になつてからは噴霧器で木を濡らして叩くようにもなった。

椎茸山の広さは、春秋の二回で一〇町歩くらい作ったとか、エザシというところには広い椎茸山があり、二〇町歩を四、五軒で作っていたなどといわれている。山は山持ちから一〇年くらいという契約で借りる。椎茸は春のものと秋のものでは異なり、春のは虫が付きやすく、保存が効かないが、秋のは干すと保存が効いた。また、これ以外にカンコといい、寒中に椎茸が生えることがあり、これは虫も付かず質がよく、干すと二年くらいはもつとのことである。これらの椎茸は干椎茸にして出荷するわけで、山には椎茸小屋といって小屋を建て、ムロを作った。ムロで炭を焚いて干椎茸にするのだが、乾燥は火が強いと椎茸が黒くなってしまい、火加減が難しいとされている。乾燥させるのに二〇日ほどは椎茸小屋に寝泊まりすることがあり、このようなときには二〇〜三〇貫の干椎茸ができた。山で乾燥させる場合は、椎茸が大量にできているときで、少ない場合は家に運び、イロリの上に炬燵檣くらいのセイロをのせ、なかに椎茸を入れて五枚程度重ねて乾燥させた。こうしてできた干椎茸は、下市方面から商人が来て、買っていったのである。

炭焼き 炭焼きについては、すでに正徳二年（一七二二）十一月に東ノ川の伝三郎外七〇名が西野村庄屋・年寄中に宛てた「一札之事」と題する文書にみえている。少々長いが引用すると、⁽²²⁾

一札之事

東之川山之内いさゝ谷より大谷下尾を限り榎木雑木之分炭山ニ買手有之由ニ而売候、而村中之者之内御材木仕出し、其外家職渡世之障ニ成候者有哉又ハ障ニ成り不申哉、銘々存寄無遠慮有躰ニ申出候様ニと疋人々々御吟味ニ候、榎山売候而年季之内ハ例年家職之外、炭を焼小出しを持縄をなゐ俵を拵売、野菜芋大根等を作売候而かせぎ大分出来増候故東之川ニハ別而勝手能御座候、其内ニ者先繰ニ榎木生立申候へ者山はけ不申候、且又東之川江毎年家職ニ参候者ハ右之跡へ植杉いたし百本ニ付二十本宛山地代として三ヶ村へ出也、銘々手柄次第杉山仕立永々所持可申候、尤地代を出し候而植やらい杉山伐惣持山之様ニ不植者猥ニ一本も伐採申間敷候、尤地代ニ出し候植杉悪山なりといへども是又我儘ニ伐荒し申間敷候、弥互ニ相守可申候、右之通ニ御座候者右榎山売候而も御材木仕出し之儀者不及申惣而障ニ成候義曾以無御座候、当村之儀ハ別而困窮いたし東之川江かせぎニ参候者共永々持返り不申故当秋御僉儀之上急度罷帰候様ニと被為仰付候得共、在所江帰候而も在付銀も無御座候故於今得不罷帰何共迷惑仕候ニ付内証願申候処、在附銀も有之様ニ被成被下忝存候、此山代割符銀ヲ以多足にいたし早々罷帰可申候

正徳二年辰十二月

伝三郎（外七十名連名）

西野村庄屋 年寄中

とあり、炭焼きに關しては東ノ川の山の榎木・雑木を炭山に買いたいという者があるので売った。榎山を売った年季のうちは炭を焼き、野菜や芋などを作って稼ぎが増えたので東ノ川は勝手がよいというのである。

この史料からは近世中期に炭焼きが行われたのがわかる。しかし近世末・明治初期になると、表3の安政四年（一八五七）の産物書上帳や明治六、七年の栃本村、白川村の産物表には炭の記載がなく、炭焼きが行われていなかったと考えざるを得ない。

炭焼きの消長は明らかにできないが、はっきりとした資料では、昭和初期から昭和三十年代が盛時だったようである。昭和十年の村勢要覧によれば、林野産物として木炭（「改良木炭」とある）が八万九五六〇貫、八万六九五六円とあげられ、昭和十五年下半期の索道積荷実績では一万四三五四俵、昭和三十四年度村勢要覧では一万四四八五俵（一俵一五kg）⁽²³⁾とあり、昭和初期にはかなりの生産量があったのがわかる。昭和十年の生産量を一俵一五kgで換算すれば二万七三九〇俵となり、昭和三十四年の約一五倍が産出されており、炭焼きは昭和初期がピークだったと思われる。

吉野山地の村々は、村ごとや集落ごとに林産物の特色があるので、上北山村での炭焼きには幾度かの流転があるのかもしれないが、

明治になってからは炭焼きによって生計を立てていた家もあり、一時は重要な産業であったといえよう。西原のある家は、明治の初めに山を三反貫って細原に分家したが、炭焼きが盛んになってからは夫婦と子供三人を連れて炭焼きをし、上北山、下北山、川上の山から山を回って歩いたなどといわれている。

炭焼きは、細原の新谷利雄氏（明治三十二年生）によれば、自分の祖父の時代は白炭（ピンチュウという）を焼いたが、自分がおこなっていた太平洋戦争中から戦後は黒炭を焼いたとのことである。つまり炭焼きは白炭から始まり、明治の中頃には盛んであった可能性もある。吉野の炭焼きは林宏氏によれば、十津川村の葛川がよく知られているが、下北山村の西川筋では尾鷲在の賀田辺の人が炭を焼き、野迫川村の弓手原では岐阜の人が入って炭焼きをしていたという⁽²⁴⁾ことで、一村にとどまらず、吉野全体での動きを捉える必要があるようである。

西原などでの黒炭の炭竈は、一俵四貫目で五〇〜六〇俵というのが標準的で、一竈に二〇日くらいかかり、一シーズン二竈か三竈焼かれた。炭を焼く山は、山持ちから立木を買って行るか、共有山をもつ組や自治会の許可を得て、その山で焼いた。共有山の場合は、焼いた炭の一部を組に提供するという⁽²⁵⁾ことで、許可を貰うこともあった。この炭は組ではお寺や神社で使う炭にしたとのことである。

（四） 林 業

上北山村は前述したように、耕地は少なく、多くの人が林業関係に従事している。昭和三十七年の調査では西原一二一戸のうち、六戸が林業関係（山林経営、山林労務、材木業）に就いているのである。このような傾向は上北山村の各大字とも同様で（ただし、村役場、森林組合、診療所、各種商店などがある河合は、林業関係は全体の約二割である）、半数ほどが林業関係従事世帯となっており、林業はこの地域の生活基盤の根幹をなしているといえる。

上北山村の林業については、すでにいくつかの論考があり、三橋時雄氏は吉野郡各地域の林業経営を表5のようにまとめている。これは昭和二十九年に調査されたもので、その後、北山川水系の筏による木材の搬出はなくなり、また上北山村の場合、造林事業担当者製紙会社を中心にした商業資本の進出が著しい傾向にある。

歴史的には、上北山村の各旧村は近世期を通じて木年貢（年貢を木材で納める）が認められていた。概略を『和州吉野郡北上組百人御杣役由緒并来歴覚』（村有文書、弘化五年の写か）によってみていくと、文禄三年（一五九四）に秀吉公が伏見城の普請のときに檜材を申し付けられ、北山川にはまだ筏道がなかったので、伯母峯を越して吉野川を下し、芦原坂を越して木津川を筏で下して運ん

表5 吉野地方の林業経営の対比(『林業地帯』による)

水系・村別	吉野川水系川上村	北山川水系上・下北山村	十津川水系十津川村
産出材の樹種	杉檜	杉檜九割、天然林材一割	北山に同じ
材種	一般用材と樽丸、磨丸太	一般用材	北山に同じ
販路	和歌山・大阪・上市・桜井方面	新宮・尾鷲(四割) 大阪・桜井(六割)	新宮(八・五割) 大阪・五条(一・五割)
木材の伐出方法	木馬を主とし、近年架線多し	川上に同じ	現在は架線を主とし
運搬方法	現在はトラック輸送	トラック七割、筏二割、索道一割	トラック一・五割、筏八・五割
経営管理方法	密植(一町当八千〜一万本) 植付後七〜八年間に延一〇回 一〇年生頃一回	比較的疎植(一町当三〜四千本) 植付後一〇年間に延六〜七回 川上に同じ	北山に同じ 植付後一〇年間に延三〜四回 一〇〜一五年生頃一回
植栽	二〇〜四五年生の間に約五回、品質生長に重点をおき暴領木・被圧木を伐る	二〇年生頃除伐、二五〜四〇年生の間に約三回、茄子伐りと称し大径木から選んで伐る	二五〜三五年生の間に約二回
下刈	五〇〜六〇年、樽丸の場合は八〇〜一〇〇年	四〇〜五〇年	北山に同じ
枝打	主に私有地を対象とす 地代支払は前価と後価を併用	主に部落有地を対象とす 地代は伐採時の分収	主に部落有地と歩山を対象とす 地代は伐採時の分収
間伐	林主↓「シュット」↓山守の關係	山守は林主に直屬	北山に同じ
伐期	山林総面積の九・三割	山林総面積の六・五割	山林総面積の三・二割
借地林制度	大和平野地帯の地主・商人資本	在村地主と尾鷲付近の商人資本	在村地主と村
山守制度			
村外所有者の林地集中状況			
造林事業担当者			

だ。翌文禄四年の検地には、畑屋敷は往古から面々が所持するもので、公方様から請けた所領ではないので銘々が弓鉄砲その他を構えて拒否したが、翌慶長元年(一五九六)には和し、「此時より初而御年貢御材木上納仕来申候」となり、北山を御材木所として杣役を命ぜられ、上組に一〇〇挺の斧(西野村一九挺、小瀬村・栃本村二四挺、川合村二三挺、白川村三四挺)を定めた。その後、北山一揆

(前鬼一揆)があったが、元和元年には上組に同じく一〇〇挺の斧が定め仰せ付けられて一〇〇人の杣役には大小と鉄砲が許され、杣役は毎年九月末と二月末から三月中旬に斧一挺に一石の米を拝借し(寛文四年へ一六六四)からは銀子だけとなる)、材木を上納した。ここにはさまざまな問題点が指摘されているが、⁽²⁶⁾ともかく一五〇〇年代末以降は、確実に木材が政治経済の中心的役割を果たしている

のである。

借地林制度 先に吉野郡各地域の林業経営のあり方を表示したが、吉野林業は、このうち借地制度と山守制度が大きな特徴であるといわれている。⁽²⁸⁾ 借地林制度というのは、一口でいえば山林の地上権（植栽権）のみを外部資本など第三者に売り渡し、伐採時に分収金（口木料）を貰うという慣行的制度である。上北山村ではこれを「口木山」といい、前掲正徳二年の史料（炭焼きの項）に類似する制度が記されている。

この制度について中尾英俊氏は、吉野地方では元禄年間に始まり、従来は「村民の林地を重んじる觀念が非常に強く、しかもその林地は村持・村民総有であつて、村外に流れるのを防ぐため個人持にせずこれを村持のままにおき、売るのをお互いに堅く禁じてきた」といわれてきたが、そうではなく「一般に地盤所有の意識が稀薄であつたから、地盤所有は余り問題にされず、毛上の権利（植栽権）のみが売渡されたと考えるべきでなからうか」と注目すべき発言をしている。今回は「山」「山林」の所有意識に関する調査は行わなかったが、これは民俗学の立場から山村を捉える場合には重要な問題であり、今後の課題となる。上北山村の近年の口木山については、島田錦蔵氏の河合自治会での調査があり、これによれば近年は次第に解消の方向がとられている。⁽³⁰⁾

山守制度 山守制度は上述のような借地林制度と不可分な関係にあり、借地林制度の発達に伴つてできた制度といわれている。⁽³¹⁾ 借地林制度は第三者が地上の木材を所有するので、ここには日常的な山林の管理育成を行う在地の者が必要となる。この人を山守というわけ、造林から伐採までの実務を担当するのである。

吉野地方の山守は一般的にこのように理解されているのであるが、上北山村のヤマモリ（山守）は、在村する山主（山林地主）のもとで植林から伐採に至るまでの実務を行う人のことで、山主によつては山守でなく、材木師と呼ぶ人を頼み、山林の管理を行うこともあった。山守は山主から山の管理を委任されている人だといひ、植林や枝刈り、下草刈り、伐採などを差配し、人を使って行ったのであり、親方（地主）が山の木を売るときには、売った金額の三分の金が貰えたとされている。つまり、山守は山の管理をよく行えば、良質な木が得られ、売却価格も高くなつて収入もあがつたのである。山守は世襲で、代々務めたが、株（山守の権利）を売ることもできたともいわれているので、村落構造においても特別な役割を演じていたと考えられよう。⁽³²⁾ 山守は植林、枝刈り、下草刈りなどの山林労務に村人を雇つており、その社会経済上の優位性は十分窺えるところである。山守制度自体は、鳥取県などにもみられるにもかかわらず、これが吉野地方の特徴だとされるのは、山守の優位性に

よるのである。しかし、河合のある家では村外の人を山守にし、この人の下に山林労務に携わる人がいたといわれており、流動的な面もみられる。

山守を置いた家は、村内でもっとも有力な山林地主であった天ヶ瀬日浦のA家など何軒かがあり、他は前述のように材木師が山を管理しているという。山守と材木師の差異については、いま一つ明らかではないが、材木師は木材の販売、伐採、運搬をするということで、販売に力点が置かれた存在のようである。現在も河合、白川、小椋に一人ずつ材木師があり、さらに近年まではこれらにもう一人ずつ材木師をしている人があったとされている。

西原をはじめとする上北山村の各大字は、後述するようにいくつかのレベルで共有山を所有し、面積的にもかなりの広さになっており、外部の商業資本による山林所有は川上村に比べて低率である。借地林制度や山守制度は、このような山林所有のあり方と深い結び付きをもつのであり、詳細な研究は今後に期したい。

外部資本の参入 上北山村の私有山林の内、村外者が所有する面積は昭和三十年の公簿によれば五一四六町歩で、私有山林全体（八七七二町歩）の約五九％を占めている。これは近隣の川上村約九五％（私有林面積一万二五二一町歩、村外者所有面積一万六九七町歩）に比べれば低く、十津川村の約三二％（私有林面積一万九八六

七町歩、村外者所有面積六三一〇町歩）に比べれば高率となっている。⁽³⁴⁾ 上北山村の山林の村外者所有面積は、その後増加し、昭和四十六年には約七二％（私有山林面積九二七三ha、村外者所有面積六七二ha）になっている。⁽³⁵⁾ 村外者の山林所有は歴史的には、すでに元禄十七年（一七〇四）の資料にみえており、明治十二年（一八七九）の河合村山反別名寄帳では山林一九三〇町余の内、共有地が一九一町余で私有山林は尾鷲の土井八郎兵衛所有の三七五町歩が最大だとされている。⁽³⁶⁾

このように近世中期以降、次第に村外者の山林所有が増え、とくに太平洋戦争後は、こうした傾向が強いのであるが、ここでは近代以後の外部資本の参入について若干触れておく。外部資本の参入といっても、これには木材購入による参入と山地買収による参入があるのだが、前者について述べていくと、この場合には多くの山林労務従事者の転入があったのである。たとえば河合では、大正六～八年頃に現三重県尾鷲市のA社が共有林の木材を購入した。五〇〇から六〇〇町歩の自然林を買い、五カ所に製材所を作り、伐採した木をある程度製材し、索道で尾鷲に運んだが、このときには山林労務従事者が一五〇〇人くらい入り込んできて、上北山の人口が倍増したといわれている。索道ができると材木ばかりでなく、尾鷲からは帰りの便に米や新鮮な魚などが積んで運ばれたり、芸者がこれに乗

って尾鷲から来たりもし、商店や飲食店、カフェーなどもできて村は大変な賑わいだったとのことである。

また、西原では昭和七年にB商店が地元の山林地主とのつながりで事業所を開き、私有の自然林の伐採、製材を開始した。自然林ではブナ、ナラ、ホウソウ、モミ、トガ、ケヤキ、栗などを伐採し、材は陸送し、板は河合から索道で尾鷲に出していた。ここでは多いときには一〇〇人以上が働き、初めは山に小屋を作って住んでいたが、この人たちは主に四国や尾鷲から来た人たちだったという。労務従事者は、庄屋と呼ばれる伐り場の責任者が集めたもので、伐採

は会社が庄屋に委託する形で行われたのである。製材工場も作ったので、ここでも三重県の五郷や尾鷲からの人を中心に五〇人くらいが働いていた。

B商店は現在も事業を続けているが、これらの例でわかるように、近代になって索道が架設されたり、道路事情がよくなると木材の売買が活発となり、人の出入りが多くなるのである。このような形の外部資本の参入は、表6の架設索道の一覧からもわかるように不断に行われたのである。

上北山村では、地元では山林労務に就く者が少なかったため、他

表6 架設索道（昭和三年十月一日現在）（『上北山村の地理』一二五頁による）

営業者	事業目的	動力	起点	終点	距離	特許年月	資本金
㊦ 索道組	自己経営製板木材貨物輸送	蒸気	三重県尾鷲町南浦字柳谷	吉野郡上北山村東ノ川出合	五・九杆	明治四十四年三月	三・五万円
尾鷲索道株式会社	一般貨物運輸	蒸気	三重県尾鷲町柳谷	吉野郡上北山村白川字滝ノ谷	九・七杆	大正二年五月	五万円
北山索道株式会社	一般貨物運輸	蒸気	三重県尾鷲町中井浦字坂場	吉野郡上北山村河合（途中東ノ川上流に中間駅設く）	一八・八杆	大正七年八月	五〇万円
明平商会	自家経営木材運送	蒸気	三重県尾鷲町又口	吉野郡上北山村名古瀬	四・〇杆	大正八年五月	六万円
高木道之助	木材輸送	蒸気	吉野郡上北山村河合	同郡同村白川字白川又奥地	四・七杆	大正八年五月	—
三国木材株式会社	自家用木材輸送	電気	吉野郡上北山村河合字渡瀬	同郡同村河合字桑瀬	一・五杆	昭和三年九月	—

表7 上北山村居住状況 (『上北山村の地理』174頁による)

		西 原	白 川	小 椽	河 合	総 計	%
居 住 の 種 類	旧 住	6	61 (1)	38	49 (6)	154 (7)	26.0 (3.6)
	分 家	53 (7)	47 (17)	22 (4)	44 (15)	166 (43)	28.0 (22.5)
	来 住	63 (27)	78 (57)	30 (4)	101 (43)	272 (141)	46.0 (73.8)
	合 計	122 (34)	186 (75)	90 (8)	194 (64)	592 (191)	100.0 (100.0)

昭和37年9月1日現在 () は昭和34年以後の居住者

地から転入してくる場合が多いといわれ、こうした人たちが居を構えるに至っているのである。昭和三十七年九月の調査によれば、表7のように五九二戸のうち二七二戸が来住者であり(ただし、二七二戸のなかには村内の大字間での移転も含む)、割合でいえば全戸の四六%にものぼる。西原区の「昭和九年度戸数割資力調査集計簿」(西原区有文書)をみると、九七戸と一事業所が記されており、それぞれの出身は日浦一一戸、天ヶ瀬一五戸、新田二戸、泉一七戸、細原九戸、小原八戸、そして他地からの来住者が三五戸(教員三、僧侶一を含む)となり、西原を構成する家々の約三六%が来住者なのである。「戸数割資力調査集計簿」というのは、区費等の徴収にかかる基礎資料で、これへの記載は区構成戸として公的に認められることである。

従来、山村社会を語る場合、僻陬性がいわれ、社会問題の一つである過疎化の問題はその僻陬性なるがゆえの所得格差が主因の一つに数えられている。⁽³⁷⁾民俗学においても、調査地選定の基準の一つに交通機関に恵まれず、往來の制限された村落というのがあげられたことがあり、山村⁽³⁸⁾僻陬という図式がある。僻陬地に古い民俗が残されているという、一種の思い込みは現在も払拭されていないが、こうした考え方の根底には、僻陬地は歴史的に家々の流入が少なく固定化されているという認識が存在しているのである。

ところが上北山村でみる限り、上述のように近代以降多くの人々の流入が認められるのである。このことは木材需要の増加と相俟って進んだことだが、山村を考えるのに民俗学的にも無視できることではない。山村のもつ資源は人々の移動を生んでいるわけで、翻って水田稲作村と比較すると、極めて重要な特色といえるのである。

稲作を基盤とする村落は、耕地Ⅱ水田は限定されており、その限定性の上で村落構造やさまざまな慣行が成り立ち、前述のような多くの人口流入は不可能といえよう。山村の場合も山地所有は村落構造に重要な意味をもち、この点では軌を一にする面もあるが、他方では地盤の所有にとられず、地上の産物で生計を立てることが可能なのである。近代以前の家々の流動は正確に把握することはできないが、吉野地方一帯は樽丸（伊丹）などの林産物の製造が盛んであり、また上北山にも近世中期にはかなりの数の木地屋が生活を営んでいたこと⁽³⁹⁾からすれば、近世においても家々の流動はあったといえよう。つまり、山村には多様な人々を受け入れられる経済的素地があったということであり、すべての山村を歴史的に固定化されたものとして捉えることは過ちなのである。

上北山村では、他地からの来住者は寄留者とされ、神社祭祀の当屋などを務められないという閉鎖性もあったが、河合の八坂神社には寄留者中が奉納した大正十三年五月三十一日銘の灯籠があり、昭

和二十一年の西原八坂神社の宗教法人名簿には崇敬者中として記されている。この名簿には一四〇戸があり、うち三二戸が崇敬者となっている。当屋祭祀は後述するように共有山の所有権利と密接な関係をもち、単純ではないが、来住者は大正期には何らかの形で神社祭祀にかかわっているのである。

林業技術の具体相

林業技術の具体相にいくらか触れておく。上

北山での林業は杉・檜の造林を中心に行われている。歴史的にも近世に幕府に上納した木材は、モミ、ツガなどもあるが、古くは檜や杉が中心で、享保十二年十二月の『吉野郡北山郷上組五ヶ村由緒書帳』（小椋奥村恵司氏所有）には延宝以前は「御材木前々ハ檜長式間より三間半迄之角物、杉長七尺幅七尺式原六寸之木目二品御材木を以上納仕候」とある。しかし、檜・杉は早くから資源が乏しかったようで、同帳によれば、延宝二、三、四年（一六七四―一六七六）の飢饉の際には檜・モミ・ツガによる上納が許され、次いで天和元年（一六八一）からは、檜は伐り尽くしたということで、ツガ・モミのみの上納となっている。植林の記録は正徳二年の史料（前掲炭焼きの項にあげた「一礼之事」）が最も古く、杉が植林されている。なお、吉野地方で盛んに行われた樽丸の生産は、上北山では元禄頃には行われ、延享三年（一七四六）の小瀬村の明細帳には、「作間ニ者、男ハ御材木仕廻候以後ハ末木雜木伊丹桶樽樽等仕

候」云々とある。ところが、幕末の安政四年（一八五七）の産物書上（表3）には「舟板」が記されているが、伊丹はなく、表4の明治初期の榎本村・白川村の産物表にもみえない⁽⁴⁾。

現在は檜・杉を造林し、パルプ材なども出され、年間の作業概要は図3にみるように、十月中旬から二月に地拵をし、二月から四月にかけて植林、六月から十月上旬が下刈り、十一月から三月が枝打ち、一方で三月中旬から四月中旬に杉・檜の種蒔を行い、伐採は年間を通じて行われている。しかし、このようなサイクルで行われるようになったのは、木材のトラック輸送が始まってからで、これ以前は「木は皮のむける時期に伐る」といい、六月から九月に伐採し、そのまま置いて乾燥させ、十月～十一月にタマ切りをして冬季に筏で北山川を下し、春三月までかかって地拵をして三、四月に植林、七～九月に下刈りだったのである。

山のケイカイ（境界）は「サコオカギリ」といい、谷から山の尾（尾根）までが境となり、サコ（谷）のサイメ（境）は二間幅に伐り開いておき、木に目印が打たれた。「山は北向きの方が良い」とされている。これは北向きの方は落葉が腐って土壌がよいからで、植林は杉はサコに、檜は尾の方にされる。サコは雨などが降ると流下物が堆積し、土ができるからで、檜は土が少ない岩のところでも育つからである。植林は最盛期には年間四〇〇町歩ほど行われている

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
旬	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下
山 林	地 拵										地	拵
	苗木植付						下	刈				
	枝	打					伐	採			枝	打
	種子採集											
畑			杉・檜種子播種									
			ジャガイモ			サツマイモ						
	ソラマメ・エンドウ									ソラマメ・エンドウ		
田		苗床準備播種			本田準備	田植除草	刈入調整					
副	椎茸栽培(春子)									椎茸栽培		
業						漁 業(淡水魚)						
		狩	猟									狩 猟

（上北山小学校調査による）

図3 上北山村の農林業暦

たが、現在は木材事情が悪く、一〇〇町歩以下だといわれている。

植林などの山仕事のとときは、木綿の古着を壊して縄状にない、火を付けて蚊火とし、腰にぶらさげておいた。飯は昼食とケンズイを弁当としてもって行く。弁当箱は尾鷲から入ってきた青漆がかかったメッパを使い、飯を詰め、梅干しを入れて魚（塩鮭やサンマ）を飯の間にはさん

だ。これを木綿の紺のウチガイという袋に入れ、かついで山に行ったものである。

木材の運搬は、トラック輸送が盛んになる前は筏が中心で、流筏は昭和三十年代まで行われた⁽⁴²⁾。筏流しを行う人はバップといわれ、河合には一〇人ほどがあり、川に堰をして水を溜め、テッポウセキといって水を一気に落として筏を流したのである。堰は木を組み、コケを詰めて作り、水の落とし口をトマイといい、長さ一間、幅六寸の板を朝入れて水を止め、午後になって一気にこれを切って流し、河合などの本流に入って再び堰を作り、池原、七色、大沼、瀬八丁と下って新宮に出していた。新宮まではおおよそ一週間かかったといわれている。筏に乗る人は、山小屋で朝、布団をたたんではいけないとされ、また、西原の八坂神社には「祈願筏路安全 明治卅八年起之 施主宮本市蔵」という銘をもった手洗い石が奉納されている。

上北山村では、植林、枝打ち、下刈りなどの造林作業に携わっている人がもつとも多い(表1)が、他に木挽を行う人などもあった。西原では細原に二人、天ヶ瀬に一人と和歌山から来た人の四人が長いこと木挽をしていた。木挽は山持ちから請負で仕事をするもので、山稼ぎをする人が木を運び出して挽くが、伐採も行うこともあった。細原のある人は、東京の木挽に付いて一四歳から二〇歳ま

で仕事を習い、親方と弟子の二人で歩き、辻堂で半年くらいトマリヤマ(山に泊まって仕事をする事)で仕事をしたことがあるという。山道具はマエビキ、ヤスリ、カスガイを二、三丁もって歩くが、これらの道具は滋賀県の甲賀郡から取り寄せた。木は六尺の長さがヒトタマで、一番幅の広い板は五尺三寸幅のトチノキの板である。なお、木挽は東京から来た人の他、近江木挽や伊勢の湊の木挽も来ていたといわれている。

山仕事をする人は、山の悪日(旧六月十四日)には仕事を休み、木挽をする人は仕事で山に入ると、それぞれの山に祀ってある山の神にお参りした。木にも山の神が休んでいる木というのがあり、これを伐ると祟りがあるなどといわれている。山の神は醜い姿の女の様であり、祭にオコゼを供えるのは、自分より醜いオコゼをみて山の神が喜ぶからだという。また、山で失せ物をしたときには、自分(男)の性器を出して「祝いめでた」の唄を歌うとみつかるといわれている。「祝いめでた」は、「祝いめでたのー若松様よー、枝も榮えてヨーホホイ葉もしげる、めでたよー」という唄である。この唄は家を造るときに地搗きにも歌われた。山の神の祭は正月二日と十一月七日である。

(五) 年中行事

上北山の暮しを生活基盤を中心にいくつかの面を述べてきたが、ここではこれらを基に行われている年中行事について記しておく。旧暦が使われたのは明治末・大正初期までで、現在は新暦で行われており、正月準備から順に日付に従い、伝承内容をあげていくことにする。(なお、*の項目は奈良県教育委員会文化財保存課編『上北山村の民俗と生物』(昭和三十九年五月上北山村役場発行)をもとに記したものである。)

餅搗き 正月の餅搗きは十二月二十七、八日から三十日にする。二十九日はクモチといって餅搗きはしない。餅は正月といっても、かつては白い餅(米の餅)は少なく、枳餅や蓬餅が大半であった。西原のある家では、一〇人家族のとき、正月の餅は二升臼に一二、三臼も搗いたが、白い餅はこのうちの二臼程度だったという。枳餅を搗くには、十一月下旬、または十二月上旬から枳のアク抜きを始めた。枳餅については「木の実の利用」で記したのでここでは省略するが、現在でも正月の餅には、一臼か二臼は枳餅を搗く家がある。餅は白い餅、枳餅、蓬餅の他に、かつてはトウキビ餅、アワ餅なども搗いていた。

煤掃き* 家によっては十二日に行われるが、かつては十三日に

することになっていたなどといわれている。

寺歳暮 西原の各家では、寺歳暮と称して暮れに宝泉寺へ豆腐一

丁とコンニャク一丁をもっていった。

門松 十二月二十九日から三十日に山から松を伐ってきて、三十日に門口にたてた。樫の木をモチ杭にし、杭の上の方をきれいに削って、これに松、クロモジ、榊、ユズリハ、ウラジロを縛り付け、門松の間に注連縄をした。米俵の縄やフジカズラ(藤蔓)、クズカズラ(葛蔓)などを使って縛る。松は雄松、雌松で、五段の松を使うともされている。

門松は「松のごとく青々と、カタギのごとくかたく、榊のごとく栄える」などといわれ、五日にモチ杭だけを残してとりはずした。モチ杭は十五日まで立てておく。門松にはモチ杭の上に元旦から雑煮を供え、十五日には小豆粥を供える。なお、河合では最近では八日の八日薬師まで門松を置くように変わってきたとのことである。

門松とは別に、家の近くの畑には、「畑の神さん」といって門松を一本立てた。これにも雑煮や七日、十五日の粥を供え、十五日に片付ける。「畑の神さん」には榊を立て、十五日以後も片付けずに、立ち枯らしにしておいた家もある。「畑の神さん」は、新しい年の豊作を願ってするのだという。

屋外には門松を立てるのに対し、家の中の床の間、エビス・大

黒、荒神さん、便所神さん（せっちんの神さん）には松や榊、お供え餅をあげる。エビス・大黒は台所、荒神さんはクドの上に祀っており、荒神さんにはセイロを重ねておく。

イタダキ膳 正月にはイタダキ膳というものを家の床の間に飾る。これは三方の上に米を一升のせ、この上にオカガミをのせたものである。オカガミは米の餅で、大きな丸餅の上に小さな丸餅を二個並べ、さらにこの上に大根や吊し柿、ミカンなどをのせる。元旦には飾り付けておき、この膳の米や餅は七日の七草粥、十五日の小豆粥等を使う。

年越詣り 大晦日には年越詣りといい、天ヶ瀬の人は天ヶ瀬の八坂神社にお参りに行く。この時には神社に朝まで宮守がいて、御神酒を出す。参拝者はこの御神酒を頂いて帰ってくる。宮守は天ヶ瀬の各家が一年ずつ順番に勤める役で、二月の年越の晩に次の人に交代する。

若水迎えと雑煮 新年の若水迎えは、除夜の鐘がなりだすで行った。西原ではヤダニの奥に飲料水の水源があって湧水が溜めてあり、ここに汲みに行ったという。若水迎えは榊とお供えの餅を一重ねもって行き、水の神様にこれらを供えてから汲んだ。家の主人が行い、新しい手桶をもって汲んできて、この若水で元旦の雑煮を作り、お茶も入れた。オカッテで火を焚くのも男の役割である。

雑煮は醤油仕立てで、家人に盛るときは雑煮餅二個と豆腐、里芋を入れる。雑煮餅というのは、小さく握った丸餅で、これは家のなかの神さん、仏さん、門松様、畑の神さんにも供える。必ず雑煮を食べるというのは元旦だけで、あとは家々によって適宜という。

元旦の挨拶 大正時代の初めまでは、元旦の朝に各家を挨拶に回った。お宮で年越し（年越詣り）、鐘がなるとお寺へ米一升到鏡餅、大根、ミカンをもって挨拶に行き、この後で家々を回る。紋付、羽織、袴の姿で歩き、各家では「オンマイ申シマス」というと、その家の人は「ドウレー」と応えて挨拶を交わした。各家の他に組頭（天ヶ瀬、三組などのレベルの組）にも米などをもって挨拶に行ったとのことである。

各家にはこのように挨拶に行っていたが、後にはお宮、あるいは小学校に集まって新年の挨拶を交わすようになった。

山の口祭 正月二日は仕事始めて、山の神の祭りをする。山の神の当屋が決まっており、ケズリバナとヘノコを杉か檜で一对作って山の神にあげる。ケズリバナは三〇cmほどの角棒の四隅を削りあげたもの（一二削りけずりあげる）。ヘノコは男根の模型で、これをあげると山の神が喜ぶのだという。ヘノコをあげるときには藁でヘノコの首を縛って榊の枝に付け、「伊勢音頭」や「祝いめでた」を唄いながら山の神に参る。山の神には魚（鯖など）一对、野菜、ス

ルメなども供える。

また、この日には、山仕事をする人は杉の木を七、八寸の長さに切つて筏に組み、奉納と書いて山の神にあげた（これはその後、子供たちの遊び道具になった）。椎茸を作っている家では、シイタケギ（椎茸木）といい、カシ、シデ、ホウソ、ナラなどの木を七、八寸に切つて奉納し、炭焼きをする人は小さな炭俵を奉納する。さらに、かつては板に丸を描いて山の尾（尾根）に置いて的にし、鉄砲で撃つこともしていた。

天ヶ瀬では山持ちと材木師がご馳走を用意し、八坂神社で一杯飲んだ。山の神は八坂神社にあるからだが、現在は天ヶ瀬組の理事長の家でお祝いをしている。

各家ではヤマハジメといい、神と餅をもってアキの方の山に行き、餅をカシの木に縛り付け、この木を伐つて家に持ってきて、門口に立てた。

万年講 伊勢神宮への代参講で、現在は五月五日に日帰りで行くようになったが、かつては十二月三十日に出かけ、正月三日に帰ってきた。

初祈禱 正月三日から七日までの間に、上北山と下北山のお寺のオッサンが寄り、各寺院で順番に初祈禱をしている。西原の宝泉寺は七日で、区の人たちはお寺にお参りしてお札を頂き、門口に貼っ

た。宝泉寺では大般若を行い、この後香の米といい、ご飯が出される。このご飯は寺のネンギョウジが各家から米を三合ずつ集めて炊いた。各寺院の初祈禱が済むと、八日には河合の薬師堂の会式で、弓矢祭が行われる。

七草 六日にセリやナズナを採ってきて、皿にのせてお床に供えておき、七日の朝、これらをまな板にのせてスリゴキなどで大きな音をさせながら叩いた。このときには、「七草ナズナ、トットの鳥が渡らぬ先に叩いておわしましょう」などと唱えた。七草粥は床の間のイタダキ膳の米を分けてとり、なかに叩いたセリ、ナズナを入れて炊く。七草粥は家の神棚や仏さん、さらに畑に立ててある畑の神さんにも供える。

カガミ開きと門松燃やし 十五日は小豆粥を作り、カガミ開きということでカガミ餅を割って粥のなかに入れる。この粥は床の間のイタダキ膳の米を使って作る。小豆粥は神棚や仏さん、畑の神さんに供え、さらに粥をもって柿などの成りものの木のところに行つて「ならにゃ伐る、なれば伐らん」と唱えて木を少しはつってから粥を供えた。

また、この日には門松や畑の神さんを取り外す（小豆粥を供えた後）。西原では門松や畑の神さんを有志会の人たちが集めてまわり、夕方に燃やした。子供たちはこのときに餅を焼いたり、ゼンザイを

作ったりして食べた。有志会というのは、西原区（天ヶ瀬も含む）の青年団を抜けた人たちが構成されている。

お日待 十五日の晩には天ヶ瀬の人たちが八坂神社に集まって般若心経を一〇巻あげた。

二十日正月 正月二十日のことをいう。

年越 節分には大豆を煎って一升杓に入れて神棚に供え、その後、各部屋に撒く。大豆を煎るときにはヒイラギの枝も火であぶり、この葉とコウヤマキの葉を木に付け、それに鰯など魚の頭を付けて家の入口や便所の入口、風呂の入口など、すべての入口にさした。ヒイラギは「鬼の目突き花」といい、魔物が入らないように入口に付けるのだといわれている。年越の豆は、手でつかんで年の数だけつかめると良いとか、豆は一部を残しておき、初雷が鳴ったときに分けて食べると雷よけになるともいう。また、年越にはイロリに月の数だけ豆を並べ、焼け具合いで天候を占うこともあった。宮守は神社に豆を供える。

節分には寒餅といって餅も搗き、オカキなどにした。

この日には天ヶ瀬の人が八坂神社に集まり、宮守の交代を行う。

初午 二月の初午は稲荷様の祭り日で、宝泉寺境内のお稲荷様に西原の人たちが小豆飯や稲荷寿司などをあげて、お参りする。

天ヶ瀬の八坂神社の祈年祭 二月二十七日で、ネギ（禰宜）に当

たっているものが餅を搗いて供える。

三月節供 女の子が生まれた家では菱餅を搗いたりして祝う。

彼岸 お彼岸のときは、仏壇の前に膳を置いてオハギや栃餅、団子などを作って供える。新仏の初彼岸の家では蓬団子を作って供え、お寺にも届ける。便所神さんにはコーノハナ（香花）をあげたりもする。春秋の彼岸とも内容は同じである。

灌仏会 四月八日の灌仏会にはお寺に行き、甘茶をたばって（買って）きて虫除けに白菜畑や大根畑に撒いた。

地藏様の縁日 四月二十四日と十月二十四日は西原の地藏様の縁日で、前もって当番が地藏さんの御供といって菓子・米・お金を集めておき、供養が終ってから飲み食いする。

五月節供 チマキを作り、屋根にはショウブ、カヤ、ヨモギを三カ所に挿す。

行者講 大峰登拝の講で、天ヶ瀬では五月五日に行った。この日をトアケの日といい、天ヶ瀬からは朝六時に出れば、夕方には帰ってこられた。

歯がため餅 六月一日には歯がため餅といって餅を搗いた。この餅を食べると歯が丈夫になるという。神棚にも餅を供える。

天ヶ瀬の八坂神社の祭 六月十五日で、禰宜に当たっているものがゴックンといって餅を搗いて供える。

半夏生 七月の半夏生には、畑に入ると頭が禿げてしまうので休み日となった。各家ではソラマメを煎って食べるのが習わしである。「種は半夏生までに蒔け」といわれ、このときまでに蒔き物を終らせた。

虫送り 七月七日の晩にお寺(宝泉寺)で行う。お寺で祈禱札を出し、大根畑などに虫がついていたりするとお札を竹に付けて立てた。これとは別に、水田があった当時は、晩の八時頃に西原区の各戸から一人ずつ出て、各自がヒノキの枝で作ったタヤ(松明)をもって火をつけ、田畑の間を鉦を打ち、ホラガイを吹き、「根虫、葉虫、送った」といいながら回って歩いた。お寺に集まってから泉の車僧の墓まで行き、そこで松明に火をつけて回り始めた。現在は有志会の人たちが、タヤを作って車僧の墓の所で火をつけ、トンネルの下河原まで降りて般若心経を五巻唱え、タヤを川に流している。この形になる以前は、白瀧様の不動尊のところでも般若心経を三巻唱えた。

吉祥講 永平寺への参拝講で、天ヶ瀬では戦前から行っていた。かつては行く時期は決まっていなかったが、現在は永平寺で七月に行われる檀信徒研修会に参加するようになっていた。永平寺で一泊して来る。

山の悪日と川の悪日 * 旧六月十四日を山の悪日といい、山に行

ってはいけないといった。また、旧六月十六日を川の悪日といい、川に行ってはいけないといわれていた。

お盆 八月七日の七日盆には仏具みがきや墓掃除をし、十四日の午後に墓参りをしてから迎え火を焚く。迎え火は、タヤとかシヤリといってヒノキのシンボチ(芯)を束ねたものを墓と家の門口で焚く。タヤには長短二種があり、墓では短いのを焚き、門口で長いのを焚く。仏壇やハツショウロウ(初精霊)に供える盆花は、シキビ(コーノハナ)を適当なときに山から採ってきてあげておく。ただし、盆花は丑の日に立てるものではないという。シキビは仏壇の他、便所さんにもあげた。

十四日には里芋、ナンキン(かぼちゃ)、梨、ぶどうなど果物や野菜を仏壇に供える。里芋は茎と葉がついたままのもので、一株あげる。また、十六日まではシンコ饅頭か素麺を一日に一回は供える。

初精霊(新仏) のある家では、初精霊棚といい、仏壇とは別に棚を作って祀る。これは古い仏はさら(新しい)仏を嫌っていじめからだという。初精霊棚は大工に作ってもらったもので、十四日の朝に出す。新仏のある家には、組や区の家から初精霊まいりとい、見舞いに素麺などをもって線香をあげにくる。

お盆の期間中には、青年団が主体となって日を選んで盆踊りをした。夜食に握り飯を握って、夜通しカマクラ踊りを踊ったという。

十六日の朝には、初精霊棚をたたみ、初精霊流しをする。棚に供えたものと新仏の戒名を書いた札を川に流す。このときにはシンコ饅頭をお土産にと川に一緒にもって行く。新仏のない家も、この日に仏壇に供えた物を川に流す。十六日にはお寺にもお参りする。

お盆が済むと家の嫁さんは、三日くらい実家に里帰りした。米一升に魚などをもち、子供を連れて帰った。

芋名月・豆名月 旧八月十五日の十五夜を芋名月、旧九月の十三夜を豆名月という。芋名月の日は、初めて芋を掘る日だといい、里芋やサツマイモを神棚、仏壇やお月様に供える。お月様の分は屋根に供える家もある。この日は他家の畑の里芋を盗んでよいとか、供えてある芋を盗んでよいといわれていた。豆名月には大豆のゆでたものとか、サヤゴシの枝豆を屋根の上などに供える。

亥の子 十月の初の亥の日は亥の子といい、農休みだった。亥の子さんは百姓の神さんだといい、各家では亥の子餅を作った。亥の子餅はイノコボタともいわれ、米にマイモ（里芋）のゴジ（子芋）を入れて炊き、レンジョウ（すりこぎ）で摺つぶしてから握り、餡をまぶしたものである。この餅は神棚、床の間や縁側にも供えるので、餅をたばる（もらう）ということで、子供たちが竹竿をもって家々を回って盗んだり、あるいは貰い歩いた。餅が貰えないと棒で戸を叩くなど、悪態をつくこともあったといわれている。なお、里

芋のイノコボタは、この時期には亥の子以外の普段の日にも作るものがあった。

不動尊の祭 十一月三日には天ヶ瀬の八坂神社の横に祀ってある不動尊の祭。この不動尊はもと笙ノ窟にあったものである。祭りに は行者が不動経をあげ、供物をする。

山の神 十一月七日は山の神にボタモチや魚（塩鯖など）をあげる。山の神にあげたボタモチは、子供たちが竹で槍を作ってたばりにいった。この日には各戸で、杉の木でケズリバナを二本作り、床の間にあげる。ケズリバナは木を七・五・三に削りかけたもの。

西原のトウニン祭 西原の八坂神社の祭りで、十一月十五日の晩にゴク搗きをしてヒネリ餅にし、翌十六日の宵宮の晩には、当屋に当たった家は区内の人を招いてご馳走する。当屋では祭りの翌日から翌年のトウニン祭りまでトウニンを勤める。

天ヶ瀬のトウニン祭 八坂神社の祭りで、現在は十一月二十七日に行われている。かつては旧暦十月十五日であった。祭の準備は一日一週間ほど前から始まっており、二十五日の晩には組の若い衆が集まって米洗いを行い、二十六日の晩のヨミヤにはゴクツキをし、ヒネリモチ（カサモチともいう）を作る。ヨミヤには宴が開かれ、二十七日にはミゴクザと称して当屋の引渡しがある。トウニンになった者は、これ以後二月十七日、五月十七日、十一月十六日の

水分神社の祭にヒネリモチをあげる。

オトゴ朔日* 十二月一日のことで、かつては小豆飯か大豆飯を炊き、オトゴ（末子）にうまいものを食べさせたという。

ハテノ二十日* 十二月二十日のことで、「ハテノ二十日に伯母峯越すな」という。この日には伯母峯に一本足の鬼が出て人を食うといわれている。

コツゴモリ* 十二月三十日のことで、この日にヒガエをする。ヒガエというのは竈やイロリの火をすっかり消し、鍋などの墨を落して塩を撒いて清めることである。ヒガエは煤掃き、お盆の十三日、お産の後などにも行う。イロリのホダはこの時までに家の主人が伐っておき、正月ホダといって新しいのと取り替える。ホダは四本で、二本は太い物を使い、イロリの四隅からなかに入れる。

オオツゴモリ* 大晦日のことで、この日には塩漬けにしておいた鮎で鮓を作って食べる。サイレ（サンマ）の鮓やコンニャクのシラアエも作ってお膳を据えて食べる。

(六) なりわいと儀礼

長文となったが、上北山村の西原・天ヶ瀬を中心に、その生産活動の諸相と年中行事について紹介してきた。個々の問題点に関してはその都度、概略を記してきたつもりなので、ここでは以上のこと

から上北山村の山村としての特性の一面とでもいうべき点に言及しておきたい。

生産活動は前にも述べたように、林業を核として行われている。歴史的にも近世を通じて本年貢が認められ、さらに杣役を定めて木材を上納することによって拝借米・拝借銀があったのであり、林業を中心とすることは一つの流れとして必然性をもっているといえる。しかし、こうした一面で、伝承などの諸資料から生産活動をみていくと、人々の活動は純粹な林業だけでなく、椎茸栽培、炭焼きを行い、かつては樽丸（伊丹）作りもなされ、山野の動物や川の魚を捕って生活の糧にあて、またソノやヤマバタで畑作を行い、水田稲作も僅かだが行われ、一時は養蚕もなされていた。さらに、山野のトチノキやカシ類の実、欠くことのできない食糧として古くから採取の対象とされ、餅や飯に加えられていたのである。こうした姿からは、単純に上北山を林業村であると結論づけるのはためらわれるのである。

それぞれの生産活動には歴史的な変化もあって平板なものとして捉えることは、勿論できないわけだが、年中行事である正月の諸儀礼をみると、二日には山の神に筏や炭俵を模したものや椎茸木のミニチュアを奉納し、山始めが行われている。伝承は断片的だが、この日には的を作って鉄砲を撃つことも行われ、また、正月には家の

近くの畑に「畑の神様」と称して松などを立て、雑煮や七日、十五日の粥が供えられている。

木材・炭・椎茸といった林産物は、山の神に対して予祝儀礼が行われ、畑作については別の神を依代をしつらえて迎え祭っているのである。さらに、畑作に関しては正月の雑煮や十五夜、亥の子には里芋が意味のある食物・供物として扱われており、これらからは里芋をめぐる文化を古層に想定することの可能性が窺え、また、水田稲作では田植が終ると田の神様に伝えるということで苗代口に神とミョウガをあげ、虫送りも共同祈願になっている。つまり、生産活動にこうした儀礼伝承を加味して考えるなら、林業・林産―山の神、畑作―畑の神、水田稲作―田の神という対応がみられるのである、まさにここには多様な生産活動が三種の生産神によって収斂された姿がうかがいあがってくる。換言すれば、生産活動は生産神を核にして多極的な構成がなされてきたといえるのである。

一般的にいつて、予祝儀礼には各時代の生産意識があらわれやすい。この点からは林業・林産はもともと重要視されている活動だといえ、生産と儀礼にみられる多極構成は、林業・林産に重点を置いて形作られているといえる。検討に加えた近世史料はごく僅かだが、歴史的にみていくなら、おそらく近世初期には如上のような生産活動の多極的な構成はできていたと考えられるのであるまいか。

山村における生産形態は多様性をもつことが従来から指摘されている。藤田佳久氏は、「山村の生業とその就業形態は多様であり、農業をベースにして林業・木材業および、それらの関連業が結合する形のほか、小規模ながら多様な副業が存在していた。これらの生業は山村の置かれた位置により、また時代によって変化を示したのは当然である。それはまた村の変化を示すものであった。」⁽⁴³⁾とし、石川純一郎氏は、その論旨に内部矛盾を含みながらも、山村形態の分類を試み、

イ、狩猟を生業とする村（東日本に分布し、狩猟集団は熊をメルクマールとする）

ロ、焼畑および狩猟を専業とする村（主に西日本に分布し、焼畑・切替畑と狩猟を複合的に営み、狩猟は猪を
 用途にする）

ハ、林業を専業とする村（主として近畿・中部に分布し、山林
 労務組織に特徴がある）

ニ、木工を専業とする村（近畿・中部を根元地とし、その周辺
 分布）

ホ、炭焼きを専業とする村（都市周辺に立地する）

これらの五形態に分類し、「山村にとって生業の複合化は普遍的な現象である」としている。⁽⁴⁵⁾

藤田氏がいう山村の生業の多様性、石川氏のいう山村の生業の複合化ということと、山村類型とは関連をもちながらもレベルの異なる問題だが、ここでもっとも注目されるのは、山村というのは一つの山村での生産活動が多様性・複合性をもつと同時に、全国の山村それぞれの特徴的な生産活動をみていくつかの類型があり、一律ではないということである。つまり、一山村の生産様式と全国各地の山村の主要生産活動とは、ともに多様な様相をもつことが予測されるのである。

上北山村の場合も、前述のように林業・林産に重点を置きながらも多様な活動が行われ、多極的な生産様式をもってきたのであり、このことが現在の職業多様化(表1参照)へと連続していると考えられる。また、一方では近代以降繰り広げられる外部資本の参入に伴う来住者の増加と受け入れも、こうした多極的な生産様式を背景としてなし得たといえるのでなからうか。

三、共有林と祭り

前章でみてきたように、上北山村における生産活動は多様な様相をもち、しかも村落を構成する家々には、林業に伴う来住戸も多く、流動的な側面をもっていた。ここではこうした村落がいかにし

て社会的に統合されているかを、共有林の管理運営と祭りから述べていくことにする。結論めいたことをいってしまえば、多様な活動が行われ、多極的な生産様式をもつ反面、共有林の所有とこれに密接に関係する当屋制の祭りによって強力な社会統合が果され、流動戸口を外に置く伝統的な社会(固定的な戸口によって構成される社会)ができていたのである。伝統的社会といっても、勿論そこには幾多の変容があるが、こうした二面性は、人と物が活発に動く生産活動を陽とすれば、伝統的社会の構成は陰ということができるし、また伝統的社会の構成は、流動的な社会に統合を保つための自衛手段だともいえる。上北山村の各集落は、動きのある生産・社会環境のなかで、共有林制度をもとに、それぞれが再統合することによって整合性を保ったのである。

(一) 西原の集落と共有林

村落区分と家々の移動 西原は江戸時代は西野村と呼ばれ、天ヶ瀬はその枝郷で、現在は全体で大字となっている。西野から西原に名称が改められたのは明治八年である。昭和六十年六月現在で戸数は八九戸である。このうち成人者が仕事の関係で来住した家は二〇戸ほどといわれている。家々は、現在は大半が国道一六九号線の周辺にまとまっているが(図4参照)、昭和三十七年の調査によれば

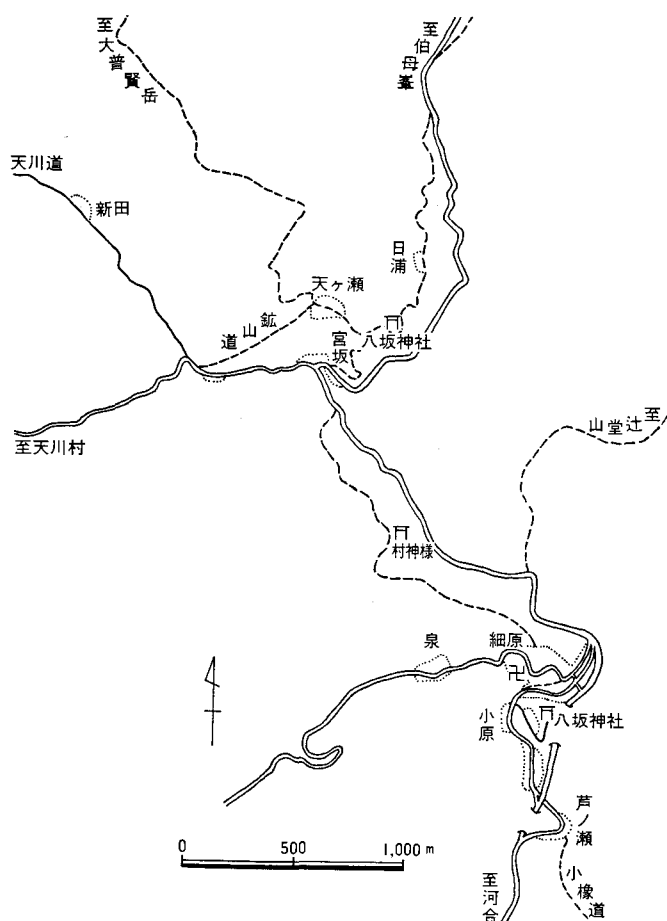


図4 西原の集落位置

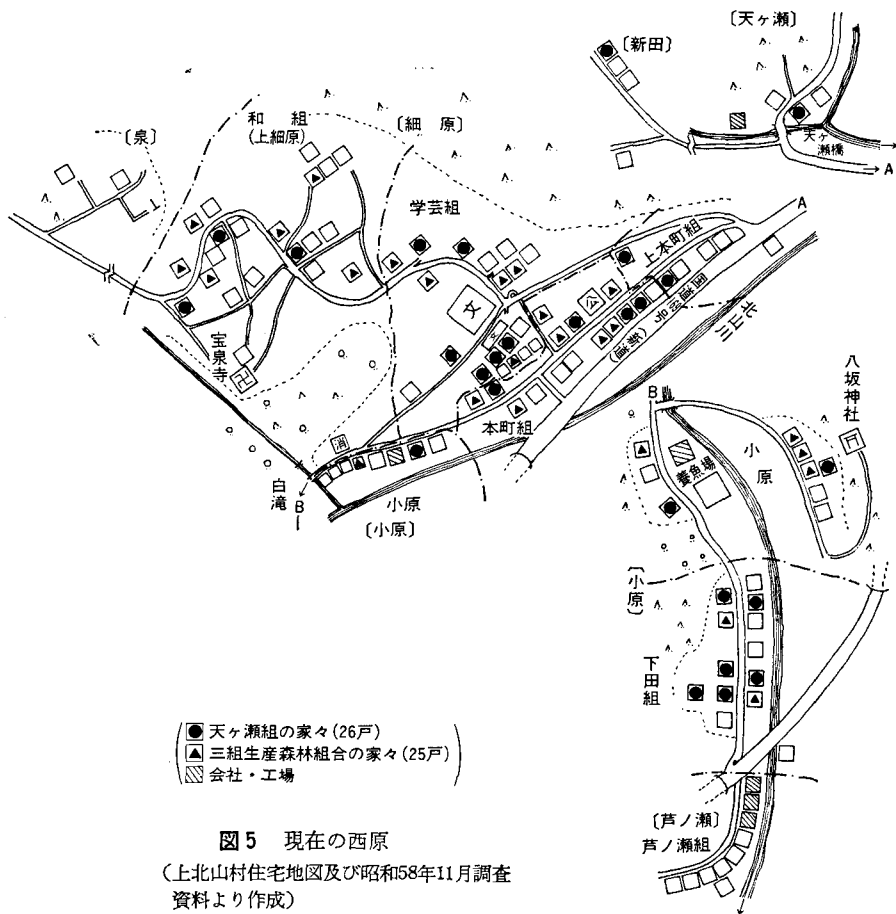
図5のように現在の西原の集落から離れたところに天ヶ瀬、新田、泉があった。天ヶ瀬、新田、泉の家々は、新国道の開通などによって現在地に降りてきたのである。

昭和三十七年の地図で説明を続けると、西原は、細原、小原、泉、天ヶ瀬に区分され、それぞれが組といわれている。これらは所謂村組に相当する集落であるが、芦の瀬は泉組に入り、新田は天ヶ

瀬組に入っており、必ずしも地理的に一まとまりの集落となっていないわけではない。集落位置をみていくと、泉は泉谷の上流にあり、細原から約七〇〇mの距離、天ヶ瀬は細原から四kmほど離れ、北山川の最上流の集落で、西原の集落は細原・小原・泉と天ヶ瀬の二つのまとまりに大別することができる。このような立地から、天ヶ瀬では細原・小原・泉を一括してシモニシ（下西）と呼び、また細

原・小原・泉はミクミ（三組）といっている一つのまとまりをもち、この範囲を西原という場合もある。

昭和三十七年九月一日時の戸数は表8のように細原（上細原、中細原、下細原）が五六戸、小原（小原、下田）が二四戸、泉（泉、芦の瀬）が一三戸、天ヶ瀬（天ヶ瀬、日浦、新田、大・天ヶ瀬橋）が二九戸で、上細原には宝泉寺（曹洞宗）、小原には西原の鎮守である八坂神社、天ヶ瀬には天ヶ瀬の鎮守の八坂神社などが祀られ、中細原には村立西原小学校、下細原には郵便局、林業センターや旅館、各種商店などもある。括弧内は各組の集落立地による区分で、日常会話などでも使われており、近隣組に相当するが、細原はその後天ヶ瀬や日浦などから転入した家があり、現在では和組（上細原）、学芸組、



本町組、上本町組に再編成されている。葬式などのときにはこの組の家々が手伝いあい、勝手仕事などを行い、他に西原中の人が香の木(シキビ)や竹を採ってきて葬家に届けた。

集落の概要は以上の通りで、現在は天ヶ瀬、日浦、泉等の人たちは細原や小原などに移り、天ヶ瀬、日浦、泉には居住戸はなくなっている(ただし、住居は残されている)のだが、家々の流入や移動は近年ばかりではなく、わかる範囲では近代以降常にあったようである。前章で記したように、木材需要の増加に伴って外部資本の参入があり、これによって西原に住むようになった家もあるわけで、西原の戸数は、明治九年には五三戸、昭和三十年には一七八戸、同三十七年には一二二戸、同六十年には八九戸と、かなり変動がみられる。

家々の流入や移動を、今では居住戸がなくなった天ヶ瀬・日浦を例にもう少し詳しくみておこう。これらに居住する家は、昭和三十七年時は天ヶ瀬が七戸、日浦が四戸(表8)で、昭和五十六年時には天ヶ瀬に一戸を残すだけとなり、同六十年九月には居住戸はなくなっているが、ここにかつて住んでいた人たちの記憶では、昭和

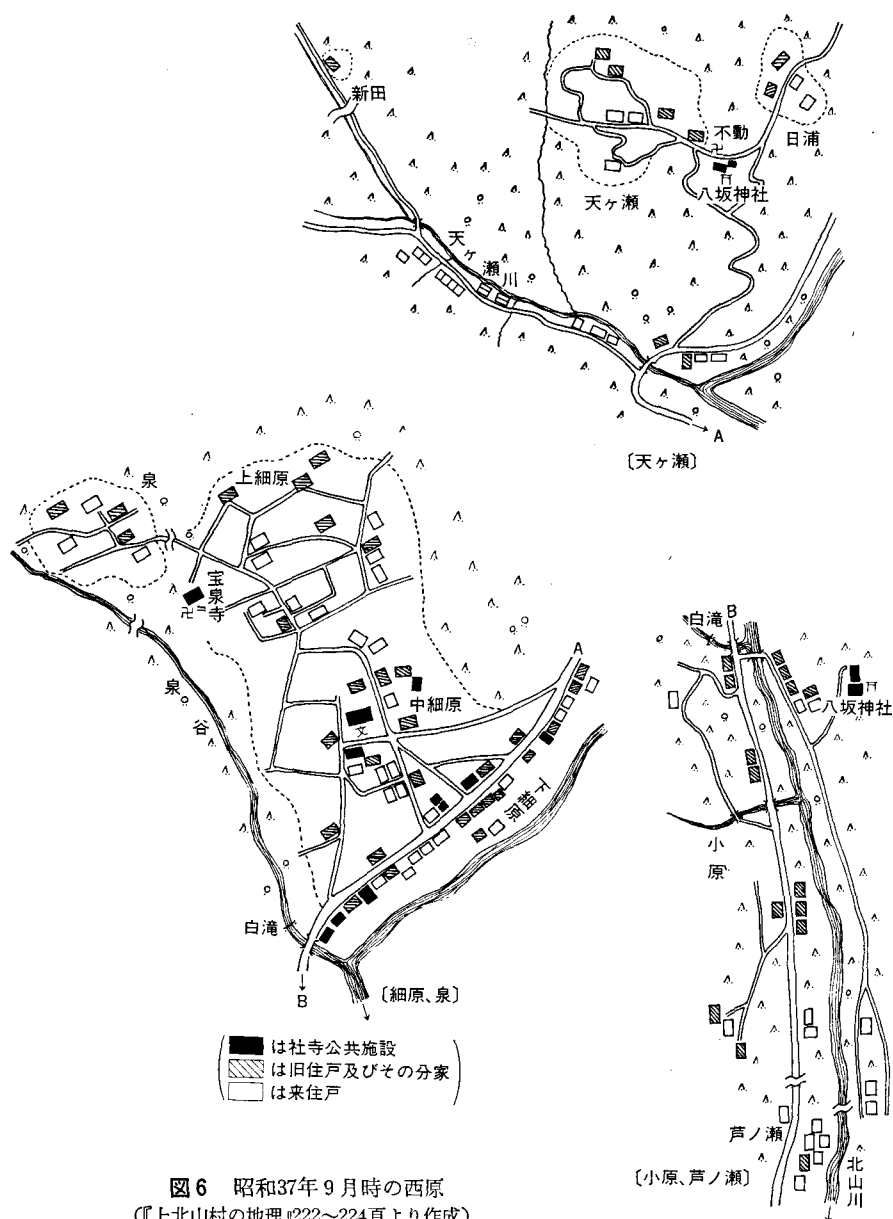


図6 昭和37年9月時の西原
(『上北山村の地理』222～224頁より作成)

十年頃には天ヶ瀬に九戸、日浦に五戸があり、大正前期には天ヶ瀬に一戸、日浦に六戸があり、古くは天ヶ瀬全体で二七戸があったなどといわれている。減少傾向は、すでに大正期にはあったわけで、『上北山村の地理』によれば、明治末・大正初の居住戸は天ヶ瀬一戸、日浦六戸で、その後天ヶ瀬から六戸、日浦から四戸が転出し、天ヶ瀬の一戸が死絶し、天ヶ瀬四戸、日浦二戸となった。しかし、その後天ヶ瀬に分家が二戸でき、他からの来住者が天ヶ瀬に一戸、日浦に二

表 8 大字西原居住状況 (『上北山村の地理』219頁による)

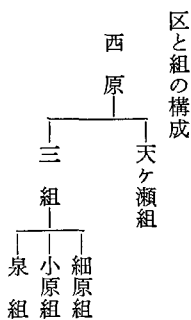
		日 浦	天 ヶ 瀬	天ヶ瀬 大橋	新 田	下 細 原	中 細 原	上 細 原	泉	小 原	葦 瀬	総 計	%
居 住 の 種 類	旧住	2	1	—	—	1	1	—	—	1	—	6	4.9
	分家	1	5	2 (1)	1	14 (1)	7	6 (2)	3	13 (3)	1	53 (7)	43.4 (20.6)
	新住	1	1 (1)	15 (15)	—	10	8 (4)	9 (3)	3 (1)	10 (1)	6 (2)	63 (27)	51.6 (79.4)
	合計	4	7 (1)	17 (16)	1	25 (1)	16 (4)	15 (5)	6 (1)	24 (4)	7 (2)	122 (34)	100.0 (100.0)

昭和37年9月1日現在、()は昭34年以後の居住者

戸あり、昭和三十七年には天ヶ瀬七戸、日浦四戸になったとある。⁽⁴⁶⁾
つまり、山村は一般的に交通の便が悪く、家々の変動がなさそうに
思われがちだが、上記の例からいえば、実際にはかなりの変動があ
るのである。

天ヶ瀬・日浦からの転出は、河合や遠く大阪などの場合もある
が、多くが細原、小原になされている。天ヶ瀬・日浦からの転出
は、分家するものが細原や小原に出ると、次いで本家も出てきたと
か、長男が嫁を貰うと老夫婦が末子などを連れて隠居するが、天ヶ
瀬に屋敷を造るのは大変なので細原や小原に出てきた。この場合に
は、末子が自力で生活できるようになると老夫婦が再び元の家に戻
ることもあった。現在、細原・小原にあるI姓の家はこのような隠
居で出たのが多いといわれている。

区と組 区というのは大字西原のことで、西原区と表現されてい
る。前述のようにこのなかには細原組、小原組、泉組、天ヶ瀬組の
四つの組があり、細原・小原・泉の組をまとめて三組と称してい



る。現在は天ヶ瀬や泉に住宅はあっても居住戸はなく、細原や小原に転出しているのだが、しかし、天ヶ瀬組は後述するように今でも共有林の所有を核に、解消されずに存続しているのである(図4参照)。

区の役員等については、区長(総代ともいう)と各組に組長があり、かつては五人の区会議員も置かれた。区長はフダイレ(選挙)で決められ、区の総会は一月にハツヨリが開かれ(以前はお寺などが会場となった)、その後何回も行われた。区費などは区長、区会議員、組長が区長の家に集まり、各家の財産収入によって等級を決めて相応の金額を徴収したのである。区の総会が済むと、次には天ヶ瀬組や三組の寄合がそれぞれ氏神などを会場にしてもたれ、さらに三組ではこの後、組毎の寄合が開かれたのである。組長などの任期は二年間であった。

区では運動会が開催されたり、全体が出て行う仕事もあった。区の共同労働は総出といい、これには道普請(道アラキとか道刈り総出という)などがあった。道普請は、西原では毎年七月四日で、各戸から一人ずつ出て、区長が中心となって里道の草刈りや補修が行われ、この前の七月二日には西原区の共有林の山刈り(下草刈りのこと)をした。区の山刈りは、現在は人を雇って行われている。道普請は自分の地区だけでなく、上北山村の各地区に分担があった。

これは他地区に通じる道の分担で、たとえば西原と小椋間の道は双方から峠まで草刈りを行い、小椋と東ノ川の間は小椋が荒谷の峠までを刈った。

また、かつては西原の宝泉寺には郷蔵があり、飢饉に供えてアワやヒエなどが集められ、備蓄されていた。これは各戸からアワやヒエを集めたもので、積立て量は区長(総代)が決め、他地から山林労務に来て住んでいる家からも、ある程度は徴収されていた。アワやヒエは一〇石くらいは備えてあったとのことである。

総出ではないが、家々が出て行われる共同労働などもあった。たとえば細原では、昭和四十年代末頃に簡易水道ができるまで、飲料水などの日用水は泉谷の上の方から溝を掘って引いていた。溝は土溝で、毎年七月にはムカイノミヤというところから赤土を採って担ぎ出し、溝の補修を行った。これは溝普請といわれ、細原に居住する家は、組に関係なく、各戸から出て行われたのである。水については、細原の本町組と上本町組では昭和二十三年に水道組合を組織し、共同で水道を作った。この組合は簡易水道ができてからは親睦を目的とする組になっている。また、細原、小原、泉では寺木、学校木といい、毎年各戸から何束と決めて焚き物を出すことも行われていた。

共有林の所有 西原では、前記のように天ヶ瀬・日浦に居住戸が

表9 土地台帳による所有者別林野面積(昭和三十七年一月一日現在) (『上北山村の地理』五三頁による)

大字別	国	有	県	有	村	有	部落	有	社	寺	有	法そ	人の	有他	会	社	有	個	人有	合	計
西原		1歩		1歩	四、〇〇三、四三三歩		九八四、一二歩		三三、四四歩		三、六二、〇〇四歩		三、六二、〇〇四歩		1歩		三、六二、〇〇四歩		二、一四〇、九八七歩		二、一四〇、九八七歩
河合		四、〇〇三、四三三歩		九、五五九、〇一〇歩	一、〇二一、一三三歩		—		九、〇一五歩		三、三三〇、一〇二歩		三、三三〇、一〇二歩		三、三三〇、一〇二歩		三、三三〇、一〇二歩		一、〇〇〇、二〇二歩		一、五五五、六六六歩
小椋		—		—	—		三、二三三歩		四、三六六歩		二、七五五、九八四歩		二、七五五、九八四歩		—		—		四、〇〇九、二二三歩		六、八九〇、八四四歩
白川		一、一四七、四四一歩		—	一、四三六、〇三三歩		一、九二二、〇一〇歩		三、一〇一歩		—		—		—		—		一、一四七、四四一歩		四、三六六、六六六歩
東ノ川		—		—	—		二、八三三、五九九歩		—		—		—		—		—		一、〇〇一歩		二、八三三、五九九歩
合 計		一、〇七七、四四一歩 〔E・B〕		九、五五九、〇一〇歩 〔III・D〕	六、五五三、六三三歩 〔V・F〕		三、九二五、〇三三歩 〔七〕		六、三三一歩 〔I・O〕		八、八五五、九九九歩 〔III・E〕		二、三三〇、一〇二歩 〔I・O〕		一〇、〇三七、四六六歩 〔I・E・D〕		四、一六六、〇三三歩 〔D・O〕		—		—

() 内は割合

なくなっても組は存続されている。西原の天ヶ瀬組の家々は図5のように細原・小原の中に点在しているのだが、このような状況下でも組が存続されているのは、組で共有林を所有することに基づいているのである。もっとも、天ヶ瀬や日浦にまだ家がある時は、庚申講などは細原・小原に転出した人たちも天ヶ瀬・日浦に行つて講に参加し、トウニン祭りも天ヶ瀬・日浦の旧住居を会場に行つたのである(天ヶ瀬・日浦に旧住居がない家の場合は、残っている住居を借りた)。転出したとはいっても、天ヶ瀬には鎮守の八坂神

社や村神様が祀られ、墓地も旧住居地にあり、精神的には天ヶ瀬・日浦と深いつながりが保たれているといえよう。

天ヶ瀬組の存続は、共有林の所有がもっとも大きな理由なのだが、このことは三組も同様である。西原では区・組の構成と共有林の所有とが符合しており、西原区の共有林、三組の共有林も存在し、それぞれが現在では財団法人や生産森林組合という公的な組織になっているのである。つまり、共有林所有を核にし、元居住地(分家の場合は出身地)による組という固定的な社会が保持されて

いるといえるのである。

上北山村の山林所有については、昭和三十七年一月時では表9のように、部落有林とその他法人有林（ただし、このなかには共有林起源でない法人有林も含まれる）を合わせると全体の約三〇％に及ぶ。また、昭和四十六年時では、国有林一二五九ha、県有林二二二七ha、村有林四七一九ha、財団法人有林五五六二ha（四団体）、財産区有林九七ha（一区）、財産組有林一二八六ha（二組）、森林組合有林一四〇ha（二組合）、会社有林三三七二ha（一〇社）、個人有林九二七三ha（三〇七人）となっており、⁽⁴⁷⁾財団法人・財産区・財産組有林を合わせると約二五％となり、⁽⁴⁸⁾西田和夫氏は、山林所有は「国有林が少なくして私有林が多いことは豊臣・徳川の検地を拒否した史実とともに注目すべき点であるが、相当数の部落林をもっていることも見のがしてならない点である」と重要な指摘している。⁽⁴⁹⁾

西田氏が指摘する検地拒否は、前章の「林業」の項で記したように、結果的には本年貢が認められることなどで和議するが、弓・鉄砲を構えて行われたのであり、こうした山村の気概が山林所有形態にもつながっていることは十分予測できるのである。ここで入会林野・部落有林の歴史的趨勢を詳述する余裕はないが、藤田佳久氏の概説に依存すれば、入会林野の変質は早い例では近世中期に始まり、明治初期の地租改正事業に伴い、本来は民有になるべき入会林

野の多くが官有地に組み込まれ、さらに明治二十二年の町村制・郡制の施行によって入会林野・部落有林の新町村有林化（公有林の成立）が図られ、明治四十三年からは「公有林野整理開発事業」として部落有林野の統一が始まり、昭和初期まで続き、部落有林は大きく減少したのである。その後、太平洋戦争後にも町村合併に伴って公有林が増え、昭和四十一年には所謂入会林野近代化法が公布施行され、入会林野・部落有林の再編成が行われるのである。⁽⁵⁰⁾

つまり、近代以降の政治・行政の流れでは、入会林野・部落有林は常に減少政策がとられてきたのである。上北山村ではこうした流れのなかで高率の部落有林が保持されてきたわけで、このことも西田氏が指摘した検地拒否と底流では関連しているのではなからうか。財団法人の設立は、上北山村では後述のように小樽自治会がもつとも早く、昭和二年に設立されているが、こうした既成の法制度の利用は部落有林の統一などに対抗するための、一種の自衛手段とみてとることもできよう。⁽⁵¹⁾

上北山村の共有林は、近世史料から数村共有の「立合山」、一村共有の「村山、村中持山」、村の中の組が共有する「組山」と「持合山」といって、立合山、村中持山、数人共有を意味する山があり、立合山↓村山↓組山↓個人持山という割山を示す史料も部分的にあるとされているが、昭和四十年代の団体有林の状況は表10のよ

表10 団体所有山林（昭和40年代）（島田錦蔵『流筏林業盛衰史』16頁による）

村		大 字		小 字	
村名	経 営 森 林	大字名	経 営 森 林	小 字 名	経 営 森 林
上北山村	上北山村有林 水分神社有林 上北山村学校林	河 合	財法，河合自治会林 八坂神社有林		
		小 椽	財法，小椽自治会林 小椽青年団山 滝川寺有林 北山宮有林		
		白 川	財法，白川自治会林 八幡神社林		
		西 原	西原区有林 西原青年山 宝泉寺有林 西原学校林	下三組 {細原 小原 和泉 天ヶ瀬組	三組生産森林組合林 八坂神社林 財法，天ヶ瀬自治会林 八坂神社林
		東ノ川	東ノ川青年山	出口宮平組 (出口，宮ノ平)	出口宮ノ平組有林

うになっている。

財団法人の設立 昭和四十年代では共有林に基づく財団法人は河合自治会、小椽自治会、白川自治会、天ヶ瀬組の四団体であったが、その後、西原区も財団を設立しており、現在では五団体となっている。各財団法人の設立年代と所有山林のおおよその面積は次の通りである。

小椽自治会	昭和二年設立	一五九〇町歩
河合自治会	昭和三年設立	三一一四町歩
天ヶ瀬組	昭和三十一年八月一日設立	七六四町歩
白川自治会	昭和三十七、八年頃設立	二一〇町歩
西原自治会	昭和五十六年設立	一〇四町歩

このうち小椽自治会と河合自治会は、ともに登記簿上は昭和四年五月二十七日設立となっている。各財団の設立時の経緯は詳らかでないが、天ヶ瀬組の場合は、財団設立時に共有林の一部を上北山村に寄付している。天ヶ瀬組の財団設立に至るまでの概略を記しておく、まず、明治四十五年には組の財産（共有林など）について次の決議が行われ、組条例が定められている。長文だが『天ヶ瀬組條例決議書』（組有文書）を引用すると、

決議書

天ヶ瀬組地域及財産ニ就テハ明治参拾四年区條例ヲ制定シ、以テ

区画及方法ヲ定ムト云モ、之ガ取扱上漠然トシテ実地ニ適セサル
処アルヲ以テ、今回更ニ組條例ヲ設ケ、組住公民ノ權利義務及役
員ノ職務權限并組財産ノ管理処分等ヲ決定シ、一ハ慣行ノ性質ヲ
明カニシ、一ハ組財産ヲ鞏固ナラシメント欲シ、別冊ノ通り決議
シ、本組在住者之ヲ遵行シ、且ツ将来本組内ニ居住セントスルモ
ノヲシテ遵行セシムベク茲ニ異議ナキコトヲ証スル為メ各自署名
捺印スルモノ也

明治四拾五年正月拾五日

岩本平蔵 印

(外二三名署名捺印)

天ヶ瀬組條例

第壹條 本組ノ地域ハ天ヶ瀬區條例ニ依ル

第貳條 本組内ニ本籍ヲ有シ居住ヲ為ス者ヲ以テ住民トシ、本條

例ニ從ヒ組有財産及營造物ヲ共用スルノ權利ヲ有シ、組
ノ負擔ヲ分任スルノ義務ヲ負フ、

但組内ノモノ新ニ一戸ヲ構ヘタルトキハ貳年、女子ノ分
家及其他ノモノハ拾年以内同一ノ利益ヲ享有スルコトヲ
得ズ

第參條 本組ノ公民ハ町村制第七條ニ準拠ス

第四條 本組公民ハ組總會ニ出席シ役員ヲ選舉シ、又ハ役員ニ選

挙セラルルモノトス

第五條 本組ハ組ノ財産營造物ニ關スル規程ヲ設クルコトヲ得

第六條 本組ハ左ノ役員ヲ置ク

組長 壹名 會計係 壹名 代議員 五名

山林係 壹名

第七條 役員ノ任期ハ左ノ如シ

一、組長 參年 二、會計係 貳年 三、代議員 貳年

四、山林係 壹年

但再選ヲ妨ゲズ

第八條 組長會計係及代議員ハ組總會ニ於テ選舉シ、山林係ハ代

議員ノ選舉ニ依ル

但役員ハ兼任スルコトヲ得ズ

第九條 組長ノ臨時代理者ヲ予メ代議員中ニテ互選シ、置クモノ

トス

第拾條 役員中欠員ヲ生ジタル場合ハ直ニ補欠選舉ヲ行フ、其任

期ハ前任者ノ殘任期間トス

第拾壹條 役員選舉ハ連記無記名投票トス

第拾貳條 組長ハ組ヲ統轄シ組ヲ代表シ其担任スル事務ノ概目左

ノ如シ

一、組總會及代議員會ニ於テ決議スベキ事件ニ付キ其議

案ヲ発シ及議決ヲ執行スルコト

二、財産及營造物ヲ管理スルコト

但之レガ管理者ヲ置キタルトキハ其事務ヲ監督スルコト

三、収支會計ヲ監督スルコト

四、証書及公文書類ヲ保管スルコト

五、代議員会ノ議決ニ依ル使用料手数料、加入金又ハ夫

役現品ヲ賦課徴収スルコト

六、組総代代議員会ヲ招集シ其會議ノ議長ト為リ會議ヲ

開閉スルコト

七、其他組内重要ノ事項

第拾參條 會計係ハ収支會計ヲ掌ルモノトス、但代議員会ヘ出席

シ主管事務ニ関シ意見ヲ述ルコトヲ得

第拾四條 代議員会ノ決議スベキ事項左ノ如シ

一、組費ヲ以支弁スベキ事業ニ関スルコト

二、歳入出予算ヲ定ムルコト

三、使用料手数料加入金又ハ夫役現品を賦課徴収ニ関ス

ルコト

四、基本財産又ハ積立金穀ノ設置及管理処分ニ関スルコ

ト

五、財産及營造物ノ管理方法ヲ定ムルコト

六、其他重要事件ニ関シ組長ノ諮問ニ答申スルコト

第拾五條 山林係ハ組長ノ指揮ヲ受ケ山林ヲ巡檢シ要スレバ其經

營ニ関スル意見ヲ具申スルヲ得

第拾六條 役員ノ報酬ハ左ノ範圍ヲ以テ支給ス、但山林係ハ実費

ヲ支払フモノトス

一、組長及會計係 年手当金五拾円以内

二、代議員 同 金拾円以内

第拾七條 本組ノ會計ハ曆年度ニ依ル

第拾八條 代議員会ハ組長必要ト認ムル場合又ハ代議員半数以上

ノ請求アルトキハ之ヲ招集ス

第拾九條 組總會ハ毎年正月ニ通常会ヲ、必要ノ場合ハ臨時会ヲ

開クモノトス、會議ハ式日前ニ告知スルモノトス、

但急施ヲ要スル場合ハ此限ニアラズ

第貳拾條 組總會ハ組公民過半数ノ出席ヲ要ス

第貳拾壹條 組公民半数以上ノ請求アルトキハ組長臨時總會ヲ招

集ス

第貳拾貳條 總會ニ於決議スベキ事項左ノ如シ

一、予算決算ヲ認定スルコト

二、不動産ノ管理処分及取得ニ関スルコト

三、第二條但書年期限ヲ短縮スルコト

四、本條例ノ改廃ニ関スルコト、但此場合ハ組公民三分ノ式以上ノ同意ヲ要ス

第貳拾參條 本條例中選挙及会議ノ手續キハ凡テ町村制ニ準拠ス
第貳拾四條 本條例ニ定ムル地域ニ就テハ明治参拾四年貳月貳拾

六日組会ノ議決ヲ認ム

第貳拾五條 本條例ハ明治四拾五年壹月拾五日ヨリ施行ス

「天ヶ瀬組条例」は以上の通りで、同書にはこれに続いて、「組金保管規程」があり、当時の「組住民役員名簿」が付され、三〇人が記されている。ただし、これには、その後の加入者も追記されており、三〇人のうち、六人が追記者である。大正二年が三人、同三年が一人、同八年が二人追記となっている。

天ヶ瀬組条例の決議の要因については記載が明確ではないが、この決議は部落有林統一事業が開始される明治四十三年から二年後に行われており、この時期に共有林の所有・運営に何らかの規制が加えられたことに基づく可能性もある。条例の体裁は整ったもので、役員は山林管理の実務を行う山林係以外は組員の直接選挙によって決められ、民主的な制度ができ上がっており、後の財団法人設立はこの条例決議がベースになっているといえよう。天ヶ瀬組への入会基準は、財団法人設立の「寄付行為書」には明記されていないが、申し合わせ的な内規は天ヶ瀬条例に近いものとなっている。

財団法人設立の直接的な経過は、「法人関係経過」なる文書が天ヶ瀬組に残されており、これによれば昭和三十年九月二十八日には村助役に社団法人設立の相談をもちかけている。その後、村当局、県庁当局との協議の結果、同年十二月に天ヶ瀬組が財産区としての認定を受け、同月に村議会に法人定款と財産区解除の陳情書が提出されている。議会では多少のトラブルがあり、再び県庁に赴いて協議され、地方課長から村会の財産区解除の議決書、財団法人定款（ここで社団法人が財団法人に変わっている）を県知事に提出するように指導を受け、村会と天ヶ瀬組との協議が行われている。この文書には法人設立運動費も記され、交通・宿泊費などで四万九五四〇円を要している。

天ヶ瀬組の財団法人設立に伴う財産処分議案は、昭和三十一年六月二十九日に提出されている。『財産区天ヶ瀬組有財産処分案 附財団法人天ヶ瀬組寄付行為書』（組有文書）によれば、上北山村に西原字入谷山の公簿面積一二三町七反五畝五歩の山林が無償寄付され、山林二一筆（公簿上は一九五町五反余）、宅地五筆、畑二筆が財団法人天ヶ瀬組に特売され、基本財産に組み込まれている。寄付行為書には二五人が評議員、内七人が理事として記されているが、これは当時の天ヶ瀬組の全メンバーである。

財団法人の運営とムラ 財団法人天ヶ瀬組の設立経過の概要は以

上の通りで、これ以前の天ヶ瀬組が組織を変えて、そのまま移行しているのである。法的な規制はあるもののこれらの間に断絶はなく、機能的にも変わっていないといえる。

しかし、財団法人化された組や自治会は、あくまで公益法人であり、形の上では村落社会の運営とは切りはなされている。こうした組などは「山林組」といういい方がされ、昭和初期に財団設立がなされた河合などでは天ヶ瀬組とは異なり、地区の全戸が財団にかかわっているわけではない。河合の戸数は約二二〇戸があるが、河合自治会に入っているのは七八戸で、新しく来た山林労務関係の従事戸や商店などは入っていないのである。財団法人の構成戸に多少の変動はあっても、基本的には設立時のメンバーで固定されているといえるのであろう。財団事業は伐採した山林への植林（かつては自治会員で行ったが、近年は人数が足りないという）の他、福利増進を目的（財団設立の目的の一つになっている）に学校の修学旅行に自治会から補助金を出したり、七五歳以上の老人に月額なにがしかの年金を出すことも行われている。河合では鎮守の八坂神社の境内に山の神が祀られ、十一月七日には山林所有者や山林労務に従事する人を中心にお祭りが行われるが、この費用も自治会から出されている。

河合の場合は財団設立から五〇年以上も経っており、集落の構成

戸と財団構成戸が一致しなくなっているのである。天ヶ瀬組の場合は河合とは事情が違っている。天ヶ瀬組の家々の居住地であった天ヶ瀬・日浦には居住戸がなく、今後も新たに移り住む可能性も少なく、集落構成戸と財団構成戸の関係はおおむねないといえ、固定的な社会となっているわけである。集落構成戸と財団構成戸の不一致、つまりムラ運営と財団の峻別ということでは、近年設立された西原自治会の方が起こり得る可能性をもっている。西原自治会は一〇四町歩の山林の他、六〇町歩余を県有林に貸しているといわれ、八九戸（六十年六月三十日現在）すべてが入っているが、今後とも住宅が増える可能性は十分あるからである。

西原の組と共有林所有について整理しておくと、西原区全体で財団法人西原自治会を組織し、天ヶ瀬・日浦から細原や小原に移り住んだ家々と天ヶ瀬橋にある家で財団法人天ヶ瀬組を作り、さらに三組といわれる細原・小原・泉の家々で三組生産森林組合を組織し、さらに細原などには組の共有林もある。つまり西原では、ある一定の条件を満たす家なら二つ、あるいは三つの共有林団体に所属するわけで、共有林所有組織が重層的に存在するのである。ある一定の条件というのは、天ヶ瀬組の場合は二年間の在住（これは先の組条例にもある）、八坂神社のトウニン祭りの当屋ならびにネギ（諸仕事を勤める役）を勤めること、お地藏様の世話人を勤めることなど

があげられている。これだけの条件を満たし、分家届や隠居届を出して世帯を構えると評議員となり、また西原から他へ転居した場合には会員としての権利はなくなるのである。ここでは天ヶ瀬や日浦の出身であることにとどまらず、村の祭祀の諸役を勤めることが重要な要件となっており、後述するトウニン祭りなどは社会的統合を果す紐帯の役割をもつわけである。

三組生産森林組合については、未調査の点が多いが、加入戸は二〇戸ほどで約一三五町歩の山林をもち、五人の理事と二人の監事が置かれ、理事のなかから組合長と会計が選ばれている（役員任期は二年という）。共有林は三組山とも呼ばれているが、この組合は、かつて細原、小原、泉のそれぞれの組がもっていた共有林を一本化してできたといわれている。ただし、前述のように細原組などはこれとは別に、さらに組の共有林をもっている。

財団法人の運営については、河合自治会の例を簡単に記したが、西原の例をみていくと、各共有林組織ごとに山林労務がある。山林の日常的な管理は山林係の人が行い、夏になると各戸から出て山刈り（下草刈り）が行われている。七月二日が西原区の山刈り、七月三日が三組の山刈り、七月五日が細原の山刈りといった具合である。共有林の植林は村の森林組合や地元の林業家に請負に出され、木材の伐採は業者が買って伐り出している。木材を売った代金は、

植林費用など造林活動費にあてられるが、天ヶ瀬組では、財団設立以前は各家に配当があったり、正月には餅代、お盆には素麺代が出されたり、さらに結婚式やお産があると祝い金が出たりした。大正十二、三年頃には結婚祝い金が一〇〇円くらい出たなどといわれている。他に消防団や婦人会などの諸団体に援助金を出したり、河合同様、子供たちの修学旅行を援助することも行われた。西原の共有林からのお金で学校やお寺も修繕、あるいは学資金の名目で積み立て、教員を雇うこともあったといわれている。

（二）天ヶ瀬の祭りと講

前項で述べたように天ヶ瀬組への加入には、神社祭祀における当屋やネギ（禰宜）、地蔵の世話人を勤めるのが要件とされている。このことは祭祀や法要が信仰的な意味だけでなく、社会的にも大きな意味をもつということだが、ここではこうした神社祭祀などの側面を天ヶ瀬を中心に述べていくことにする。

再三記してきたように、天ヶ瀬（以後、断わりのない限り日浦も含めていう）には天ヶ瀬橋付近を除けば、居住戸はなくなり、日常生活の大方は居住地の細原や小原などでこ足りているのである。しかし、居住地は変わっても、依然として天ヶ瀬組のもつ役割や意味は大きく、社会的紐帯となっている。また天ヶ瀬の地に居住戸は

ないといっても、彼の地はまったくの廢墟と化しているわけではなく、氏神の八坂神社や組で祀る村神様、不動尊、さらに一部の家の墓地や無縁仏の墓地などがあり、現在も行き来が続いている。つまり、天ヶ瀬は祭祀・他界空間の役割を今でも担っており、天ヶ瀬組の人々の精神的な依りどころとなっているといえよう。前章でみてきたように経済的には、多様で多極的な生産様式をもっている社会的・精神的には極めて強い統合要件が存在しているのである。

トウニン祭り 八坂神社の祭りをトウニン(当人)祭りといい、細原や小原に住む天ヶ瀬組の家々も参加し、もっとも重要な祭りになっている。祭日は、かつては旧暦十月十五日であったが、のちには新暦十一月二十七日となり、また、昭和三十年に起筆されている『法人天ヶ瀬組年中行事』(組有文書)では十一月二十二日にゴクツキ(後述)、翌二十三日に不動尊の祭りと祭典が行われており、幾度かの変遷があるようである。トウニン祭りの名の由来は、これは昔でいえば元服式で、男子が生まれ順にトウニンとなり、この家を当屋として祭りの中心になるからといわれている。トウニンの決定は組の総会で行われ、トウニンになると葬式には参列しないし、ヨトギも遠慮し、一年間は祭りのたぐいに供物を進ぜる役を勤めるのである。また、葬式のあった家はブク(喪中)で祭りには参加しないとされている。以下ではこの祭りの概要を順を追って紹介する。

トウニン祭りの直接の準備は、まず天ヶ瀬組の各家からタダマイ(粳米)を一升ずつ集めることから始まる。この米はオゴクマイといわれ、祭りの一〇日から一週間前に集められる。オゴクマイが集まると、十一月二十五日の晩には組の若い衆が当屋に集まって米洗いをし、翌二十六日の晩は宵宮で、当屋に若い衆と組の男たちが寄ってゴクツキをする。これは米を搗くことで、二升臼で一臼搗いて餅にし、ヒネリモチを作る。ヒネリモチは直径5cm、厚さ1cmくらいの丸餅で、供物に使う分の他にミゴクザ(後述)の参列者に配る分と撒き餅にする分を用意する。神社への供物にするヒネリモチは、カサモチといい、下面中央を押して真中が盛り上がった形にしたものを二枚重ねにする。八坂神社、山の神、村神様の分と、庚申や不動といった小宮用には小さいものを作る。

宵宮にはゴクツキと同時に、シロキ(白酒)を入れる筒も作る。筒はイタドリを採ってきて一節ずつに切り、周りの皮を剥ぎ、二本を一吊りにして藁で縛る。このなかに蒸したオゴクマイと御神酒を入れてシロキにするのである。これは宵宮の晩、当屋の家の床の間に置き、翌朝のミゴクザの時に参加者(各家の戸主)に一吊りずつ配られ、割って頂くことになる。他に神社に供える分や参拝者に配る分も用意する。神社に供えるのは、普通の年は一二掛け、閏年は一三掛けで、配る分は二十七日に神社でお祓いが行われてから配ら

れる。

宵宮のゴクツキが済むと当屋の家で宴となる。この宴は盛大なもので、家の表座敷と客間が使われ、かつては若い衆が大騒ぎをしたので、当屋になると前もって部屋の床板まで取り替えることもあったなどといわれている。当屋での宴席は、床の間に神主と宮守（ネギのこと）が作った幣束を立てて開かれ、一番座に各家の戸主、二番座に戸主以外の男、三番座に勝手元の人たちなどが付き、朝方まで続けられた。宴席の料理はコンニャクのシラアエ、キンピラ、大根膾、椎茸・大根・マイモ（里芋）のニゴミ（煮メ）などや酒の肴に大根の輪切り（これを白兎などと呼んでいる）が付けられ、小豆の御飯（小豆粥）と白菜の漬物も出され、さらに引物に魚（鯖とか鯛）が付けられた。宴席には小豆粥に漬物がつきものだったので、漬物祭りといういい方もされている。茶碗などは神社に用意されているのを使うが、料理の費用などは当屋もちで、また天ヶ瀬に居住戸があった時代は、細原や小原に住んでいる家は当屋を勤めるのに天ヶ瀬の親戚の家や空家になっている家を借りたのである。

宵宮の宴が終り、翌二十七日にはミゴクザ（『法人天ヶ瀬組年中行事』では「御供座」とある）といって八坂神社で式典があり、再び宴席が設けられるが、これに先だって当屋の引渡しが行われる。トウニンに当たった者は、前述のように葬式には参列しないなど潔

斎が要求され、一年間は各祭りに供物をする役割がある。トウニン祭りの後、小椽にある水分神社の二月、五月、十一月の祭りにはヒネリモチを五重ねずつ作って供え、このうちの二重ねを持ち帰る。三回とも同様に行い、当屋の家には都合六重ねのヒネリモチが残っていることになる。ミゴクザの朝には、この餅を八坂神社にもって行き、当渡しが行われるのである。当渡しは拝殿でなされ、供物にしたヒネリモチの一枚を盃にし、神主が酒を注いで次のトウニンが飲み、残った五重ねのヒネリモチも新トウニンに渡して終る。当渡しは済むとミゴクザである。各家から戸主が参加し、トウニンや組の役員が上座に着いて祝詞の奏上などがあり、参列者に三枚ずつヒネリモチが配られる（『法人天ヶ瀬組年中行事』には昭和三十年、三十一年とも「御供座平餅一戸主五枚」とある）。この後、ヒネリモチを参拝者に撒き、直会の宴となって終了する。なお、小椽にある水分神社は上北山中で祀る神社だが、もとは天ヶ瀬にあったといわれ、天ヶ瀬がカギモトとなって組長が鍵をもっていた。

天ヶ瀬のトウニン祭りの概略は以上であるが、こうしてトウニンになり、当屋の役割を果たすと組入りの一つの条件が整うのである。昔でいえば元服式だとされ、トウニンは一人前としての社会的認定を受けるための通過儀礼ともいえるわけだが、一方では若者にとつては大任となるトウニンは、固定化された伝統社会を維持するため

の一つの装置としての意味をもつのである。

トウニン祭りは天ヶ瀬の八坂神社ばかりでなく、西原の八坂神社でも行われている。西原のトウニン祭りは細原・小原・泉の、三組が行うもので、この点からも西原の中の日ヶ瀬、三組それぞれの自律性が窺えよう。天ヶ瀬は行政的には西野村の枝郷であったし、大字西原の一部のだが、共有林の所有や鎮守祭祀などからいえば、所謂ムラとしての独自性をもつのである。西原のトウニン祭りは、一五歳になるとトウニンになる資格があるとされ、ほぼ天ヶ瀬と同様に行われていた。なお、かつては一五歳になると一人前で、赤いフンドシを作ってもらったといわれている。

ネギとネンギヨウジ 八坂神社の祭礼は、トウニンが決められて行われるが、日常の管理や祭礼の世話にネギという役が受け持っている。ネギは宮守とも呼ばれ、天ヶ瀬組では、この役を勤めるのも組入りの条件となっている。ネギの役目は、祭礼時の供物の調達、神社の清掃などで、天ヶ瀬では二月の年越から一年間が任期で、組に所属する家を順廻りで一人ずつが当たっている。西原区内に居住する家が行うのである。供物の調達というのは、二月二十七日、六月十五日の祭礼（トウニン祭りと合わせて三回の祭りがある）に、組で糯米を買ってネギが餅に搗いたり、二月の年越には豆を供えたりする。大晦日から元旦にかけての年越詣りには、神社に詣めて御

神酒を出すなどの世話も行う。ネギに当たった人も潔斎が要求され、葬式などには参列しないことになっている。

西原の八坂神社にもネギ（宮守）の役があり、同様に祭礼時の供物の調達などを行っている。西原の場合は、来住者もあり、この役目は原則としては氏子が順に勤めることになっていた（ただし男手がないような家は任からはずす）。西原の八坂神社は、公的には西原全体の鎮守で、昭和二十一年の宗教法人名簿には天ヶ瀬組の家々も氏子として記されているが、実際には天ヶ瀬組以外の西原、つまり細原、小原、泉の三組が祭礼などを行っており、この役も共有林所有組織の構成（この場合は三組）と密接につながっているのである。

西原の八坂神社のネギは一人だが、別に一人の補欠者が決められている。ネギの選任は、十一月に万年講（伊勢講のこと）の代参者を決めるときに同時に行われる。三方に米をのせ、この上にネギを置いていない人の名前を書いた紙を置き、神社総代が天照皇太神宮の剣先のお札で釣り上げて決める。この方法は、ツリアゲといわれ、天ヶ瀬でも万年講の代参者を決めるのに行われている。

ネンギヨウジ というのは、細原にある宝泉寺（曹洞宗）の世話人のことで、これは天ヶ瀬組から一人、細原から一人、小原・泉から一人の三人が当たっている。正月の初祈禱などには各家から米を出

すが、これを集めて回るのもネンギョウジの役割である。寺院の維持には西原全体で当たっているわけで、建物の修繕、電気代などは区の負担であった。宝泉寺は、もとは泉にあり、興泉寺という寺号で、南朝北山宮にゆかりのある車僧深山禪師が開祖とされている。泉から現在地への移転は天明朝と伝えられ、元の泉の地には、車僧の墓と「南帝勸願興泉寺旧址」と彫った石塔が建てられている。なお、宝泉寺境内には、稲荷社、白瀧の主を祀るヤツメさんという祠（願かけに鉄の鳥居が進ぜられている）、インボトケ（荒縄で縛って祈願する）などが祀られている。

村神様 天ヶ瀬組ではムラカミサマと呼ばれる小祠を祀っている。これは細原と天ヶ瀬の間の山腹の旧道の脇にあり、井場兵庫、ワサビ太夫、オクタマ太夫を祀った祠で、年代は不詳だが、かつて巫子のような人にみてもらって祀り始めたと伝えられている。

小祠は石垣で囲って土盛りした上に二社あり、なかの勧請札などをみると向かって左の祠の中宮には御神体があり「奉勧請村上天明神」と墨書されている。右の祠には「兵庫頭霊神」と記した木札が祀られ、明治二十四年十一月九日銘と昭和三十年七月十日銘の棟札がある。つまり、一社は村神様、一社は射場兵庫を祀る祠である。なにゆえにこれらの小祠を祀るようになったかも伝承がなく、縁起は不安定だが、射場兵庫は射場家の先祖、ワサビ太夫は岩本家の先

祖、オクタマ太夫は仲村家の先祖であるなどという。

村神様の祭日は決まっておらず、トウニン祭りのときにトウニンがオゴク（ヒネリモチ）をもってお参りし、また正月にもトウニンが参拝する。『法人天ヶ瀬組年中行事』の昭和三十一年には村神様に四枚の平餅を供えたことがみえている。ともかく伝承が薄く来歴ははっきりしないが、天ヶ瀬組全体で祀っているのは確かである。村神様という名称からはさほど古くないと思われるが、その名称は天ヶ瀬のムラとしての意識のあらわれとれよう。

地蔵と不動 天ヶ瀬組では地蔵尊（石仏）と不動尊も祀っている。地蔵尊は新伯母峯トンネルの入口にあるが、何回かの移転を経て現在地で祀られるようになったものである。古くは辻堂山の堂の森という場所⁽⁵³⁾にあり、当時は上北山から下市方面へはこの尾根道を通って伯母峯を越えた。その後、明治の初期には北山川沿いの道（伯母峯道）ができ、尾根道から下に降ろされ、さらに旧国道（東熊野街道）の開通で移転した後、現在地に移っているのである。この地蔵は日を限って願をかけると願いが叶うということでヒギリ（日限）の地蔵といわれ、女の人乳が出なくて困る場合、洗米を供えて願かけしたなどのことである。地蔵尊の縁日は四月と十月の二十四日（現在はこれに近い日曜日）、この日には僧侶が法要をあげ、天ヶ瀬組の地蔵の世話人（これも当屋と呼ぶこともある）

が餅を用意して餅撒きをする。地蔵は天ヶ瀬組が維持管理するもので、この世話人も前述のように天ヶ瀬組への加入条件となっている。

不動尊は天ヶ瀬の八坂神社の前に祀られている。『法人天ヶ瀬組年中行事』を見ると、昭和三十年代前半にはトウニン祭りのときに「不動明祭り」が行われているが、もとは十一月三日に祭ったといわれ、天ヶ瀬組のなかの行者が不動経をあげていた。この不動も、もとは笙ノ窟で祀っていたのを太平洋戦争中に移転したもので、笙ノ窟にあったときは、聖護院、三宝院の奥駆けのときにはここで護摩が焚かれていた。

講 天ヶ瀬で行われていた講には、万年講、行者講、吉祥講といった社寺への参拝講と庚申講のような社寺参詣を目的にしない在地の講とがある。このなかでもっとも盛大だったのは万年講で、これは伊勢神宮への代参講である。各講はいずれも天ヶ瀬と三組（細原・小原・泉）は別組織で行われている。代参講の費用は組の負担となっており、講集団の構成もトウニン祭りなどの神社祭祀と同じ構造をもつわけである。ただし、トウニン・当屋、ネギ、地蔵の世話人は組の構成員の果すべき義務となっているのに対し、社寺への代参は義務を伴いながらも権利としての要素が大きい。

各講の内容を記していくと、万年講は伊勢下向ともいわれ、天ヶ

瀬では現在では五月五日に行われている。この講は一時中断されたり、下向の日が幾度か変わっているようで、『法人天ヶ瀬組年中行事』の昭和三十三年には、一月二日に「今年ヨリ伊勢大神参拝を始む」とあり、「初参り」に三人が記され、「参拝規程 一、御札二體 ハシ一善 一、土産 御菓子 一、御酒一升 一、肴二本」とある。この日は山の神の祭りの日であり、同書には続いて十一時に山の神の式が終了し、十二時に高田和橋まで代参者を迎えに出、十三時に次年度の代参者として三人と補欠を一人決め、宴会に移って十五時に終了。そして、山の神への組からの御供として餅米五升、酒一升、肴一封出したことが記されている。

これに対し、伝承では徒歩で伯母峯を越えて伊勢に行ったので往復四、五日かかり、暮れに八坂神社で下向の式をして出発し、伊勢でお神楽を奉納してお札を請けて一泊し、正月三日に帰ってくるようになった。代参者は三人を選び、うち一人はブク（葬式）があった場合などに備えた補欠で、二人が伊勢に代参し、帰りには代参者の家がサイレ（サンマ）の餅や巻寿司などを持って途中まで出迎えに出たといわれている。

これらからすれば、参拝者の帰村は正月三日から二日となり、さらに五月五日に変わり、代参者も二人から三人となったのがわかる。代参者の決め方は前記文書にはないが、代参者が帰って来たと

きに八坂神社に集まり、三方の上に米を盛って、その上に代参して
いない人の名を書いた紙を置き、これを代参から帰ってきた者が伊
勢の剣先のお札で撫でると次に行く人の名札が飛びついてあがった
といわれている。

万年講は三組もほぼ同じで、費用は各組で出し（現在はお金を積
み立てている）、三人が十二月二十九日に出発し、帰ってくる正月
三日には代参者の家の者が新茶屋までご馳走を持って出迎えに行
き、その場で食べ、他のムラの人是在所の入口で伊勢音頭と「アシ
ガルおめでとうございます」という挨拶で迎え、その足で八坂神社
へ行き、持ち寄りのご馳走で一杯飲んだ。ただ、三組ではクジで当
たらなかった人も抜け参りといって付いて行くことがあったり、戦
前までは年三回のお日待の宿を代参者の家が勤め、三組の人たちが
寄り、伊勢神宮の掛軸を床の間に懸けてご馳走を出したとのこと
で、代参者は伊勢参拝の役目だけではなかったようである。

吉祥講は永平寺へ参詣する講で、これは天ヶ瀬では昭和初期から
あり、年長者が三人ずつ順番に組の費用で代参している。万年講や
吉祥講はこのように組負担の講であるが、行者講は大峰山への参拝
講で、天ヶ瀬からは日帰りができるので代参ではなく、希望者が連
れだつてトアケの日（五月五日）に行き、お札とダラスケを買って
きた。庚申講は、天ヶ瀬の家を順に宿として庚申の日に集まり、青

面金剛の軸をかけて般若心経を唱えたりしたとのことで、ともに天
ヶ瀬組を基盤としているが、経済的には各自の負担となっている。

四、結びにかえて

以上、上北山村西原区を中心に、二つの問題に絞って民俗の様相
を述べてきた。伝承実態の叙述にかなりの分量を費やし、やや冗長
に流れたところもあるが、問題にした点は理解が得られたものと思
う。二つの問題というのは、一つは生産様式の実態であり、一つは
社会的統合の様相である。山地立地村―山村の生活が如何なる経済
基盤の上に成立ち、そこではどのような結束のあり方がみられるの
だろうかということである。要約を以て結びにかえると、上北山村
西原区を舞台にして描き得たことは、山村の経済基盤は多様な内容
をもち、その生産様式は多極的な性格をもつということであり、さ
らに一方では、いく段階かの社会レベルで共有林を所有し、これを
大きな要件として社会統合が果され、さらに神社祭祀や講行事など
によってこれが補強されているということであった。

生産様式の多極性は、林業・林産物に重点が置かれながらも、林
業に伴う流入人口を社会的にも受け入れる素地となり、この点では
水田稲作村と比べると大きな差が認め得るわけである。生産活動か

ら山村をみるなら、交通条件には不利な点が多いが、とくに近代以降は耕地を基盤にしない生活が可能であり、多様な生産活動と多様な様式は、山村の生活を捉えていく際の一つの指標になり得るのである。

共有林の所有は経済面でもさることながら、社会的にも極めて重要な意味をもっているといえる。藤田佳久氏は「山村における共同的契機はほとんど入会林野・共有林野・旧慣行の存続する林野の維持と利用とに集約されているとみてよい」ことから、「山村の村落構造を入会林野の有無によって類型化することが可能」とし、さらにこれをもとに地域類型化が可能かどうかを検討しているが、ここに紹介してきた上北山村の例からも、共有林の存在が山村社会を捉える指標に十分なり得ることが予測できるのである。社会がいかにして統合されているかという問題は、近年における都市の民俗研究をみても重要な命題の一つとなっており、しごく現代的な課題でもある⁽⁵⁵⁾。西原区では、西原区とその中の天ヶ瀬、三組それぞれ強い結束をもった共有林所有社会を形成しており、神社祭祀や講集団もこれに見事に対応している。こうした固定的な戸口によって構成される、いわば伝統社会は、生産活動によってもたらされる流動的な社会・経済環境に対抗して生まれてきたものである。そして、さらにここで注目されるのは、共有林所有社会の強化に公益法人（財団

法人）という、民法に基づいた制度を導入していることである。組織を公益法人として共有林を守った例は、全国的には明治末からみられるが、上北山では村内に五団体もの財団法人が設立されているのであり、山林所有をめぐるは古く検地の拒否などにあらわれたような自律的な気概が窺えよう。財団法人という近代的な制度の導入からは、地理的には僻陬といえても、社会的、経済的には先進的で、僻陬とはいえないであろう。

（付記）最後になったが、本稿をなすにあたり、共同研究の上北山班で調査をもにした佐々木高明教授、岩井宏實教授、松崎憲三助教授には、多くの助言を頂いた。さらに、本プロジェクトの坪井洋文教授をはじめとするメンバー各位による研究会での討論からは、さまざまな示唆を得たことを記しておく。昭和五十八年十一月の調査では、堀充宏氏の協力を得、その資料も使わせて頂いたことも明記しておく。

また、調査地上北山村では、西原区の新谷利雄・テフ御夫妻、岩本重雄御夫妻、仲村守一氏、岩本公介氏、森脇清一郎氏、梅迫吉四郎氏、浦東スワ氏、河合の福山秀男氏、小椋の奥村儀三郎氏、奥村忠四氏、奥村隆司氏、奥村恵司氏、奥村やす江氏、さらに村教育委員会の教育長富山尚一氏をはじめとする職員の方々、及び上北山村

森林組合の方々からは多くの御教示と御協力を頂いた。末筆ながらあつく御礼申し上げる。なお、御教示・御協力を頂いた方々の中には、執筆時にはすでに逝去された方もおられる。あわせて御冥福を祈る次第である。

註

- (1) 「山村民俗」民俗学研究所編『民俗学手帖』
昭和二十九年十月初版 古今書院
- (2) 『日本の山村』の第六章
昭和五十六年五月 地人書房
- (3) 『民俗と地域形成』三六〇～三六九頁
昭和四十一年十一月 風間書房
- (4) 奈良県教育委員会文化財保存課編『上北山村の歴史』
昭和三十九年五月 上北山村役場
- (5) 奈良県教育委員会文化財保存課編『上北山村の地理』
昭和三十九年五月 上北山村役場
- (6) 岸田日出男編『北山由緒書』
昭和二十四年五月 私家版
- (7) 奈良県教育委員会文化財保存課編『上北山村の民俗と生物』
昭和三十九年五月 上北山村役場
- (8) 佐々木高明「アマボシ考—白山麓のヒエ穂の火力乾燥法—」『日本民俗風土論』昭和五十五年九月 弘文堂
- (9) 昭和十七年九月 日本常民文化研究所
- (10) 『大滝ダム関係民俗資料緊急調査報告—中間報告書—』
昭和四十四年三月 奈良県教育委員会文化財保存課
- (11) このような焼畑と植林の関係は、すでに明治三十一年十一月刊行の森庄一郎著『挿画吉野林業全書』にもみえている。
- (12) 前掲(4) 二〇二頁
- (13) 山村における食糧事情については、『斐太後風土記』を素材に、松山

利夫、小山修三、秋道智彌らによって詳細な分析が行われている。
(松山利夫「明治初期の飛騨地方における堅果類の採集と農耕」『国立民族学博物館研究報告』四卷一号、昭和五十四年三月、小山修三・松山利夫・秋道智彌・藤野淑子・杉田繁治『斐太後風土記』による食糧資源の計量的研究)『国立民族学博物館研究報告』六卷三号、昭和五十六年九月など。松山は、このなかで飛騨地方の主要食糧の構成を植生帯と合わせて次のように類型化している。

表11 植生帯と主食糧の構成のモデル(松山利夫、昭和五十四年による)

海拔高度	植生帯	主となる食糧	第二次的食糧	主要食糧構成のモデル
一〇〇〇m以上	ブナ帯	雑穀		雑穀型
八〇〇〇m	漸移帯	雑穀・堅果類		雑穀・堅果型
六〇〇〇m	クリ帶上部	雑穀	コメ・堅果類	雑穀型
四〇〇〇m	クリ帶下部	コメ	雑穀・堅果類	コメ型
二〇〇〇m	コナラ帯			

西原は集落としては四〇〇m～六〇〇mに立地し、クリ帶下部に位置しているが、土地利用や食生活の伝承からはクリ帶上部の類型にならないかと思う。

- (14) 前掲(4)一五七頁
- (15) 同右 一五一頁
- (16) 同右 一五六頁
- (17) 前掲(7)所収
- (18) 前掲(7)四九頁
- (19) 前掲(5)八八頁

- (20) 前掲(4)一五五頁
- (21) 前掲(4)には「他国へ売出し分」などとある。一五四頁
- (22) 前掲(4)一七五頁
- (23) 前掲(5)
- (24) 林宏『吉野の民俗誌』昭和五十五年三月 文化出版局
- (25) 京都大学人文科学研究所編『林業地帯』昭和三十一年、島田錦蔵『流筏林業盛衰史』昭和四十九年 林業経済研究所や前掲(4)、(5)など。
- (26) たとえば延宝検地以後は山年貢が課せられるようになり、杣役負担者と検地帳記載の高持百姓の関係、さらに杣役の権利の分化(八本役、半役、小半役、小半ノ半役に分化する)、上北山と下北山の杣役の異同等が指摘されている。前掲(4)、島田錦蔵『流筏林業盛衰史』による。
- (27) 吉野郡一帯の林業をいうが、狭義には川上村など吉野川上流域の林業をさす。
- (28) たとえば潮見俊隆編『日本林業の分析—山村社会の構造—』昭和三十七年三月林野庁林政部、榊源助『わが吉野川上林業』昭和四十五年私家版
- (29) 潮見俊隆編『日本林業の分析—山村社会の構造—』三四四～三四五頁。なお、島田錦蔵は『流筏林業盛衰史』のなかで、前掲正徳二年の史料は地代木を別に植え付けるように解釈でき、所謂吉野式の借地林業とは別種の地代支払い形態としている(一六四頁)。
- (30) 前掲『流筏林業盛衰史』一七〇～一七三頁
- (31) 前掲『日本林業の分析—山村社会の構造—』三六四頁
- (32) この点は今回の調査では明らかにできなかったが、川上村の場合、山守はムラの有力者か、林地を所有している(所有していた)者などが当たり、村・ムラの支配的階層に属すとされている(『日本林業の分析—山村社会の構造—』四一七～四二二頁)。
- (33) 前掲『日本林業の分析—山村社会の構造—』四二二頁
- (34) 前掲『林業地帯』九二頁
- (35) 前掲『流筏林業盛衰史』一四頁
- (36) 前掲(4)二一〇頁
- (37) 今井幸彦編『日本の過疎地帯』岩波新書 昭和四十三年五月
- (38) 昭和九年から柳田国男を中心に行われた所謂「山村調査」は、結果的には柳田の意図した結果は得られなかったが、調査に当たった調査地選定の基準の一つのこのような点があげられている。「山村調査」というのは、正式には「日本僻陬諸村に於ける郷党生活の資料蒐集調査並に其の結果の出版」という名称である(田中宣一『山村調査』の意義)『成城文藝』第一〇九号昭和六十年一月による)。なお「山村調査」については、現在、成城大学民俗学研究所によって総合的な再検討が進められている。
- (39) 前掲(7)五八～六八頁
- (40) 前掲(4)一八二頁
- (41) 同右一五一～一五四頁
- (42) 前掲(5)によれば昭和初期からトラック輸送が始まるが、戦前は六〇%が筏、二八%が自動車、一二%が索道で、戦後はトラック輸送中心になり、北山川本流では昭和二十五年頃に流筏がなくなり、東ノ川でも昭和三十一年には筏による輸送はなくなったとある(一二七頁)。
- (43) 亥の子にはイモボタが作られるが、これについて野本寛一は『焼畑民俗文化論』(昭和五十九年五月雄山閣)のなかで、イモボタなどの芋餅は、亥の子が焼畑栽培の里芋の収穫祭であったことを意味しているのではないかとしている(三五一～三五六頁)。
- (44) 『日本の山村』一五〇頁 昭和五十六年六月 地人書房
- (45) 「山村の村落形態」『国学院大学日本文化研究所紀要』第三七号 昭和五十一年三月 国学院大学日本文化研究所
- (46) 内部矛盾というのは、湯川洋司氏「山村民俗文化研究の視点と方法—研究史をふまえて—」(『季刊どるめん』三〇号昭和五十六年十二月)で指摘するように、具体例としてあげている会津山村の類型化と整合性をもたないことである。
- (47) 『上北山村の林業』昭和四十六年

- (48) 財団法人有林には、昭和四十五年十月に設立された財・土井林学振興会の所有林も含まれる。同会は尾鷲市の土井八郎兵衛氏の所有産林の寄付によってできたもので、東ノ川を中心に公簿面積七八〇ha、実面積約一二五〇haを所有する（前掲島田錦蔵『流筏林業盛衰史』一七五～一八二頁による）。
- (49) 前掲(5)四四頁
- (50) 前掲(44)二一五～二二六頁
- (51) 公益法人の設立に依って入会林野・部落有林を維持している例には、前掲潮見俊隆編『日本林業の分析―山村社会の構造―』によれば、明治四十三年設立の旧東京府西多摩郡古里村丹三郎の社団法人丹三郎共済会、大正三年の山形県南置賜郡三沢村の財団法人田沢自彊会、大正十三年の長野県下高井郡平穂村の財団法人和合会などがある（八七～八八頁）。
- (52) 前掲島田錦蔵『流筏林業盛衰史』一五九～一六四頁
- (53) 上北山村教育委員会編刊『わたしたちの村』昭和五十一年四月
- (54) 前掲(44)一六五～一八〇頁
- (55) 都市民俗の研究として行われている祭りの研究や町の諸集団の研究は、一面では社会統合の諸相をめぐる問題であるといえ、また、荻野恒一氏が『過疎地帯の文化と狂気』（新泉社昭和五十二年三月）で警鐘した精神病理などの問題も、大きな枠組みでは社会的アイデンティティーにかかわり、こうした文脈のなかで扱い得るであらう。



天ヶ瀬岩本重雄氏旧宅屋敷（昭和57年8月）



岩本氏旧宅の畑（縦畝、昭和57年8月）



トウキビとアワの穂（種子用、昭和56年11月西原）



トチの実の割り方（昭和56年11月西原）



天ヶ瀬の山の神（八坂神社脇）



河合八坂神社の灯籠 来住者が奉納



流筏の安全祈願の水鉢（西原八坂神社）